

北海道方言の共通語化・新方言の 半世紀後の様相

～実時間トレンド調査から読みとる
変化のプロセスと変異の現況～

高 野 照 司

北海道方言の共通語化・新方言の半世紀後の様相 ～実時間トレンド調査から読みとる変化のプロセスと変異の現況～¹

高野 照 司

目次

1. はじめに
2. 今、実時間研究が注目されている
3. 実時間研究における二つのアプローチ
4. 本実時間調査における先行研究：調査Ⅰ（国研1965）・調査Ⅱ-a（国研1997）・調査Ⅱ-b（小野1983）
5. 本調査（調査Ⅲ）：実時間トレンド調査
6. 考察とまとめ

1. はじめに

戦後、日本各地の諸方言が盛んに研究され、全国的規模での「共通語化」の進行が明らかにされてきた。一方、それと同時進行で、日本各地の若者世代によるその土地固有の「新方言」の生成（井上1983）や地元方言への回帰事象（真田1999）など、全国一律の共通語化とは相反するローカルな言語変化も日本各地で報告されている。北海道方言においても、約20年の間隔で行われた国研の2度の調査（国研1965, 1997 [1987年調査の成果報告]）により、実時間的視点から全道的な共通語化が明らかになった一方で、特に若い世代における新方言事象の存在も確認されている（小野1983, 国研1997）。

しかしながら、1980年代後半から90年代初頭にかけて行われた調査（国研1987年調査, 1990年調査の小野1993など）を最後に、その後の北海道方言の共通語化の様相や今日でも消失したとは言い難い北海道方言の実態を大規模に記述した研究はほとんど見当たらない。²それからほぼ四半世紀を経た今、共通語化は北海道でどのような進展を遂げたのか、また、それとは逆行する「土着的」変化として、かつての「新方言」がその後、北海道でどのように伝播し、今日の北海道方言の固有性を保っているのかなど、いくつかの重要な問いが残る。

本論考は、それらへの回答を得るための試みの一つとして、北海道方言的語彙および文法項目の使用（意識）について、筆者が2010年夏から2011年初頭にかけて行った経年的調査の成果を論じる。³今からおおよそ半世紀前と四半世紀前に国立国語研究所によって行われた二つの大規模調査（国研1965, 国研1997 [1987年調査の報告書]）の成果を踏まえながら、北海道方言の共通語化と新方言の伝播に注目し、過去半世紀にわたる北海道方言の変化のプロセスを実時間的観点から記述する。

キーワード：言語変化, 実時間調査, 共通語化, 新方言, 北海道方言

2. 今、実時間研究が注目されている

従来の言語変化研究の圧倒的大多数は、現時点で観察される世代差を、その言語が過去から現在にかけ辿ってきた変化の道筋を映し出すものと想定する「見かけ上の時間」仮説に基づいて行われてきた (Chambers & Trudgill 1998)。時の流れを一コマのスナップショットのように今この瞬間で止め、現時点で観察される世代間差異を過去の解釈や未来の予測に役立てようという考え方である。

「見かけ上の時間」仮説は、個人語が一生涯を通じて不変であるという「日常語 (vernacular) の不変性」という大前提に立脚している。我々は、生まれ育った環境で用いられている地域色 (方言色) の豊かな日常語を「言語形成期」(おおよそ、小・中学校時代) までに獲得し、それ以降、その日常語は一生涯それほど大きく変化しないと言われている (Chambers 2009)。この法則を適用すれば、現在 (2013年) の老年層話者 (例えば、60～80歳代) の日常語は、この世代の話者が言語形成期に生きた時代 (おおよそ50～70年前の1940～60年頃) にその地域社会で普及していた方言の特徴を有し、現在の中年層話者 (例えば、30～50歳代) の日常語は、1960～80年頃の地域方言を反映する、などという想定が可能になるわけである。さらには、現在の青年層話者 (10～20歳代) の日常語は、今後数十年にわたり当該地域社会で徐々に勢力をふるうことになる言語変化の将来の姿であろうという予測も成り立つことになる。

しかし、当該仮説のみに立脚した調査だけでは、比較的若い世代で進行中と見られる変化が、例えば、若者の流行り言葉のように、一過性の短命な変異に過ぎないものなのか、その後も長く生き残り、やがてはそのコミュニティ全体に拡散する「言語変化」となりうるのか、それらを見極めることは難しい。言うまでもなくその見極めには、一定の時を経た後、同一コミュニティを対象に、同一の方法で繰り返し調査する「実時間調査」が強く望まれる。

特に近年、久しく「見かけ上の時間」研究が圧倒的主流であった海外の言語変異・変化研究において、「実時間」研究の重要性を改めて指摘する学派が台頭を見せている。例えば、実際の時の流れの中で、調査対象コミュニティに生じた社会変動と深く関係するかたちで、「見かけ上の時間」仮説によっては予測しえなかった地域方言の変化の動態を明らかにした研究 (Blake & Josey 2003; cf., Labov 1963) や上述した「個人語不変」の大前提を取って検証する研究が増えてきている。特に後者の研究成果として、個々人の日常語は人生経験や社会変動を経て変化するという「生涯変化」(lifespan change)⁴の可能性が繰り返し指摘されており (Kerswill & Williams 2000; Sankoff & Blondeau 2007など)、言語変異・変化研究における近年の新たな展開の主軸になりつつある。さらには、個人語の不変性を言語相によって異なるものとみなし、限定的に捉える立場もある。一般に、個人語の語彙については、職業を中心とした様々な生活体験を通して変わりやすいが、音声面は変わりにくいとされ、特に語彙アクセントのような韻律的側面は、分節音に比べ生涯変化しにくいことが指摘されている (Chambers 2009)。

日本国内に目を向けると、国研の鶴岡調査を初め、早くから実時間研究が盛んであったことは周知の事実である。北海道方言を例にとると、27年の時を経て富良野市で行われた実時間パネル調査⁵ (国研1965 [1959年調査実施], 国研1997 [1986年調査実施]) があるが、確かに言語相ごとに特徴的な生涯変化の実態が見て取れる。例えば、語彙項目においては、「安定型」の項目 (シバレル, ハク) は全く変化を示さない一方、「微減型」(トーキビ, カッチャク, ユルクナイ) や「急激衰退型」(ゴショイモ, カテル) と言える項目などがあり、共通語化へ向けた生涯変化は語

彙種により異なる進捗を示す。分節音については、1965年の初回調査時点ですでに高い割合で共通語化が進んでいたため比較しにくい、ほとんどの項目（[i] [e] の区別など）で微増が見られる一方、ガ行子音の鼻音化（「釘」「中学」「道具」など）については、どの年齢層でも初回調査と再調査間で大きな食い違いは見られなく、25年の時を経てもほとんど変わっていないという意外な側面も見られる。一般に最も変わりにくいと言われる韻律面においては、予備調査であるため分析対象語彙数は少ないものの、「主人」（シュジ'ン、共通語型は「シュ'ジン」）、「火箸」（ヒバ'シ、共通語型は「ヒ'バシ」）、窓（マド'、共通語型はマ'ド）などの名詞アクセントは、どれも話者の加齢とともに共通語型への変化を起こしているとされ、「個人語は不変」とする一般化とは相反する結果が出ている。

実時間に基づく検証が不可欠となる「生涯変化」の研究はまだ不足しており、上記の研究成果も含めて、分析結果はコミュニティーや言語領域ごとにまちまちで一貫性を欠く部分が少ない。今後は、より多くのコミュニティーでさまざまな領域（語彙・文法・音声面）にわたる検証が必要とされ、より包括的な理論の構築が強く期待されている。

以上のように、時間と手間はかかるものの、言語変化を捉えるためのより信頼性の高いアプローチは、一定の時を経た後、同一地域社会を再度調査する実時間（経年的）研究であることは言うまでもない。また、実時間研究は、言語変化研究の中心的課題である「変化原因」（なぜ変化が起こったのか）やその背景となる話者意識の問題、変化の中心勢力の分布や変化速度など「変化プロセス」（どのように変化したのか）などへの洞察に極めて有益な情報を与えてくれる（ロング他 2001）。

3. 実時間研究における二つのアプローチ

実時間研究には大きく分けて2つの調査方法がある。第1の方法は、「トレンド調査」と呼ばれ、数十年後に同じコミュニティーを対象に、過去に行われた調査と類似の方法で再調査を行う。「変化の『動向』（トレンド）を調べる」という意味で、過去の研究が予測した変化の動きが現在どうなっているかを調査する。トレンド調査の協力者は、前回の調査と同一の話者（住民）である必要は必ずしもなく、性別や年齢層間のバランスがとれるように「ランダムサンプリング（任意抽出）」によって選出される。任意に選ばれた話者は、その地域住民の「代表」と考えられ、その地域全体のことばを代弁する役割を果たす。

実時間調査を実施するための第2の方法は、「パネル調査」と呼ばれ、前回の調査に参加した被験者に再度コンタクトをとり、時間の経過とともに個人のことばがどのように変化したのか（または、しなかったのか）について調査を行う。パネル調査は、前回の調査から数十年が経過した後で、当時の調査協力者を検索することから始めるため、協力者の獲得にかなりの労力と根気を要する。長い年月が経てば、街の様子や各協力者の生活が大きく変わっていることも多く、消息不明（転居や死亡など）で追跡を諦めなければならないケースも出てくる。連絡が取れたとしても、健康上の理由など個人的な都合で調査を断られることもしばしばある。しかし、パネル調査が成功すると、ことばの経年的変化について、極めて貴重な資料を得ることができる。言語変異・変化研究において、もともと実時間調査自体が非常に少なく、同一の協力者を追跡調査するパネル調査に至っては、世界的にも実践例は極めて希である。

実時間調査の理想型は、トレンド調査とパネル調査の併用である。それぞれが互いの弱点を補い合うことで、最強の研究成果を出せるからである。トレンド調査は、調査対象となるコミュニ

ティーからランダムに協力者を選ぶという点で「恣意性」が高く保たれ、前回の調査から再調査に至ることばの変化について、より一般化が可能な発見が得られる。しかし、あくまでも年齢層集団を中心としたマクロな視点で経年的変化を見るため、集団に埋没してしまうことになる話者間の個人差やその個人差の社会的背景など、変化の動機づけや変化プロセスに関する細かな説明にはあまり適さないと言える。一方、このような弱点は、個々の話者に密着して調査が行われるパネル調査によって補うことが可能となる。パネル調査では、さまざまな社会的背景を持つ協力者（住民）が、それまでの人生を通して、進行することばの変化にどのように関わってきたのかを直接的に知ることができるからである。しかし、トレンド調査に比べ、パネル調査では、協力者確保の点でどうしても小規模な調査にならざるを得ないこと、特定の話者に限定した調査であることからコミュニティー全体に当てはまる一般論を導くための検証能力に少々難があることなどが弱点として挙げられる。

本論考では、上記第一の調査手法（トレンド調査）を用いて北海道方言の経年的変化を記述する。一方、筆者は、札幌方言に特化した実時間パネル調査も数年前から継続的に行っており（高野2011）、近い将来、両調査手法による成果を統合的に議論する場を設けたいと考えている。

4. 本実時間調査における先行研究：調査Ⅰ（国研1965）・調査Ⅱ－a（国研1997）・調査Ⅱ－b（小野1983）

本実時間調査は、主として以下で解説する三つの大規模調査（国研1965、小野1983、国研1997）の成果を土台に、北海道方言の語彙および文法の経年的推移を記述する。便宜上、調査実施年の古い順に、調査Ⅰ（国研1965）、調査Ⅱ－a（国研1997、1986～88年に調査実施）、新方言に特化した調査Ⅱ－b（小野1983）、そして本調査（2010～2011年調査実施）を調査Ⅲとする。

ただし、特に国研による調査Ⅰ（国研1965）・調査Ⅱ－a（国研1997）は、調査対象地、調査項目、分析結果の掲載方法などにおいて統一性を欠く部分も多く、実割合（％）による経年的推移の記述が困難な場合がしばしばある。そのため、調査ⅠおよびⅡ－aにおける複数の調査成果を総合的に読み取りながら各調査項目の経年的動態を把握し、本調査（調査Ⅲ）の結果との対応関係を考察することにした。各先行研究において参考とした個別調査の概略は以下のとおりである。

調査Ⅰ—国立国語研究所（1965）

- ・「3世調査」：1959年実施。札幌（52名）、帯広（48名）、釧路（61名）に在住する3世を対象とした調査。被験者総数161名（男59、女67）。36才以上・25～35才・24才以下の3年齢層での比較。調査票を用いた面接による語彙・文法・発音・アクセントの調査。
- ・「富良野調査」：富良野市で1959年に実施。10代2世50名、10代3世50名、30代2世50名、30代3世50名。被験者総数200名（男100、女100）。調査票を用いた面接による語彙・文法・発音・アクセントの調査。
- ・「高校調査」：1960年実施。全道に散らばる40高校を対象。各高校の生徒5～6名ずつ、被験者総数239名（男139、女100）。調査票を用いた面接による語彙・文法・発音・アクセントの調査。

調査Ⅱ－a—国立国語研究所（1997）

- ・「富良野パネル調査」：1986年実施。前回調査（調査Ⅰ）に参加した富良野市住民のうち106名

を再調査。調査方法は調査Ⅰと同様。ただし、結果の開示は、語彙項目、アクセント項目の一部のみ。

- ・「高校生調査」：1988年実施。全道に散らばる52高校を対象。各高校の生徒50名以上、被験者総数2688名。郵送式の回答者自記式調査票による語彙・文法の調査。
- ・「富良野継続（トレンド）調査」：1986年実施。無作為抽出による富良野市民300名に面接および留め置き式アンケートを実施。語彙・文法・発音・アクセント・言語行動などの調査。ただし、結果の開示は、文法、発音、アクセント項目のみ。
- ・「札幌継続（トレンド）調査」：1987年実施。無作為抽出による札幌市民351名に面接および留め置き式アンケートを実施。富良野継続調査の札幌版。ただし、結果の開示は、文法、発音、アクセント項目のみ。

調査Ⅱ－b－小野（1983）

新方言の使用に注目し、札幌市、旭川市、網走市の中学校・高等学校で行われた語彙と文法に関するアンケート調査。場面差や標準語意識なども含む。中学生・高校生（若年層）1087名（男545, 女573）、その親（中年層）652名（父196, 母443）、合計1739名が被験者。札幌・旭川は1980年、網走は1981年に調査を実施。

5. 本調査（調査Ⅲ）：実時間トレンド調査

5.1 本調査の概要

先行研究を参考に項目を精選し、北海道方言的語彙（73項目）と文法（41項目）からなるアンケート調査（直接回収または郵送）を2010年夏から2011年初頭にかけて実施。北星学園大学の学部生・大学院生を中心に、学生の同世代の友人・知人（若年層）、学生の親や親世代の知人（中年層）、学生の祖父母や祖父母世代の知人（老年層）など、スノーボール方式で調査規模を徐々に拡張し、最終的に計241名（男性78, 女性163）から有効回答を得た。北海道方言の分布パターンから全道（表1）を「札幌」（表2）・「（札幌を除く）内陸部」（表3）・「海岸部」（表4）の3地域に分けて地域間のバランスがとれるように配慮した。しかし、結果的に男女の総数（男78, 女163）が不均衡なままで終わり、とりわけ性差を論じる際には注意を要する。

表1 調査Ⅲ（本調査）の被験者（全道）

	青年層（15～29）	中年層（30～59）	老年層（60+）	合計
男	20	34	24	78
女	60	60	43	163
	80	94	67	241
割合	33.2%	39.0%	27.8%	

表2 調査Ⅲ（本調査）の被験者（札幌市）

	青年層（15～29）	中年層（30～59）	老年層（60+）	合計
男	13	11	8	32
女	27	19	9	55
	40	30	17	87
割合	46.0%	34.5%	19.5%	

表3 調査Ⅲ（本調査）の被験者（札幌を除く内陸部）

	青年層（15～29）	中年層（30～59）	老年層（60+）	合計
男	4	11	8	23
女	15	22	13	50
	19	33	21	73
割合	26.0%	45.2%	28.8%	

表4 調査Ⅲ（本調査）の被験者（海岸部）

	青年層（15～29）	中年層（30～59）	老年層（60+）	合計
男	3	12	8	23
女	18	19	21	58
	21	31	29	81
割合	26.0%	38.3%	35.8%	

調査Ⅲ (2010～2011) 時点で, 調査Ⅰでの若年層は老年層, 調査Ⅱ - a, bでの中年層は老年層, 若年層や中・高校生は中年層に属することになる。

5.2 経年的変異・変化のタイプジー

調査Ⅰ, Ⅱ - a, b, および本調査 (調査Ⅲ) の結果から, 北海道方言の語彙および文法の使用 (意識) の経年的推移を以下の3タイプ (「衰退型」・「保持型」・「土着語化」) に分けた。3つのタイプ分けは, 調査Ⅰ, 調査Ⅱ - a, b当時の当該語彙・文法項目の使用 (意識) 状況と現時点 (調査Ⅲ) での変異の様相との対比に基づいている。

タイプⅠ「衰退型」

共通語化の進行を背景に方言形は衰退の一途をたどる。衰退の経年的推移パターンからさらに3細分類: Ⅰ - A「死語化」, Ⅰ - B「漸次衰退」, Ⅰ - C「近年衰退」を設定。

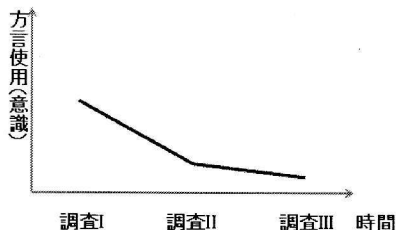
Ⅰ - A. 「死語化」項目: 調査Ⅰですでに衰退が指摘され, 調査Ⅱ (a) で急激な衰退が確認。調査Ⅲでは, 特に若い世代 (中年層・若年層) へ向け死語化が進む。

調査Ⅱ - aにおいて, 調査Ⅰ時点からの激減または衰退が見られる項目。また, 調査Ⅱ - aの高校調査で全道的な衰退または特定地域 (特に海岸部) のみでの限定的な保持が見られる項目。

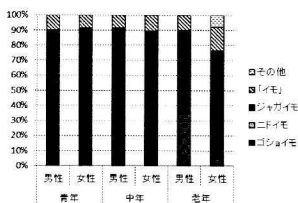
各項目後のカギ括弧内には, 本調査Ⅲにおける全道の使用割合 (%) の平均値を年齢層 (老年・中年・若年) ごとに付記した。(紙幅の都合から, 全道平均のみグラフ化して掲載。) しかし, 地域 (札幌・内陸部・海岸部) や性別などに特筆すべき数値が見られる場合, 比較のためそれらもカギ括弧内に記載し, 関連するグラフも適宜掲載した。また, 下線を付した項目は後で詳述する。

これらの項目については, 「見かけ上の時間」仮説に基づいた二つの調査 (調査Ⅰ, 調査Ⅱ - a) による消長の判別, および将来の変化予測がほぼ妥当であったことが本調査Ⅲで確認された。一方, 本調査から, 若い世代へ向けての急激な方言形の衰退は, 特に札幌・内陸部で顕著で, 海岸部はなんとか踏みとどまっているという変化の動態も明らかになった。

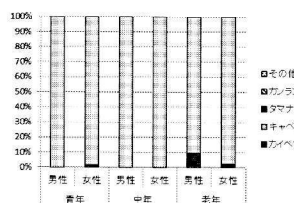
タイプⅠ 衰退型
細分類ⅠA「死語化」



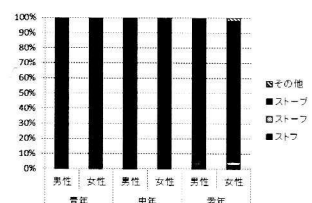
語彙: ゴショイモ (じゃがいも) [老16% (m35%, f5%), 中0%, 若0%]・**カイベツ** (きゃべつ) [老5%, 中0%, 若1%]・**ストーフ** (ストーブ) [老5%, 中0%, 若0%, ※海岸老10% (m13%, f5%)]・**エント** (エントー) (煙突) [老13%, 中2%, 若3%, ※海岸老14% (m29%, f10%)]



1. ゴショイモ (全道)



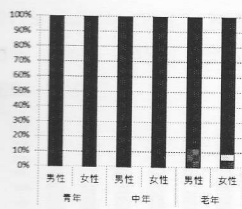
2. カイベツ (全道)



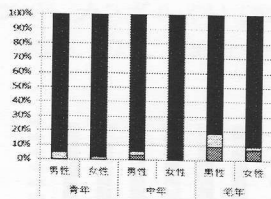
3. ストーフ (全道)

北海道方言の共通語化・新方言の半世紀後の様相

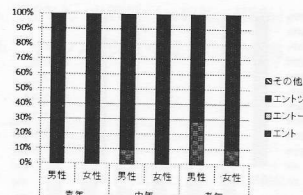
カガト (かかと) [老57%, 中10%, 若5%, ※海岸老70% (m88%, f64%), 中14% (m0%, f24%), 若14% (m33%, f11%)]・**クロブシ** (くるぶし) [老9%, 中12%, 若3%, ※海岸老9%, 中14%, 若5%]・**スツカイ** (すっぱい) [老0%, 中1%, 若1%]・**カテル** (仲間に入れる) [老11%, 中4%, 若0%]・**タナク** (重い物を持ち上げる) [老27%, 中12%, 若0%, ※海岸老43%, 中20%, 若0% (聞くm33%)]・**ヤバチー** (ヤバシー) (きたならしい) [老37%, 中14% (m23%, f9%), 若1%, ※海岸老48% (m71%, f41%), 中21% (m25%, f18%), 若5% (m0%, f6%; 使ったm33%, 0%)]・**ホイト** (乞食) [老27% (m43%, f18%), 中17% (29%, f10%), 若4% (m5%, f3%) ※海岸老33% (m63%, f23%), 中20% (m25%, f17%), 若5% (m33%, f0%)]・**オガル** (草や木が成長する) [老39%, 中33%, 若7% ※海岸老54% (m75%, f41%), 中40% (m33%, f44%), 若14% (m33%, f11%) ※内陸老40% (m25%, f50%), 中42% (m55%, f36%), 若5% (m0%, f7%)]



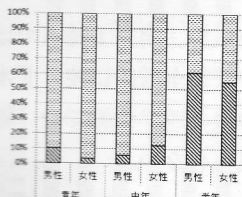
4. ストーフ (海岸部)



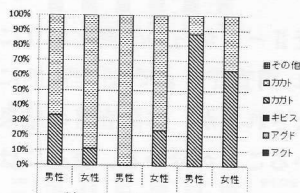
5. エント (エントー) (全道)



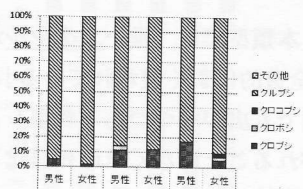
6. エント (エントー) (海岸部)



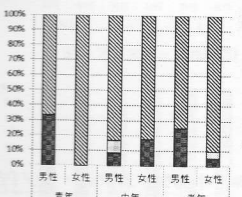
7. カガト (全道)



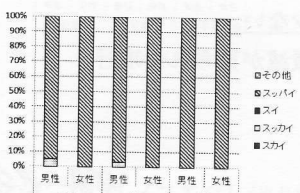
8. カガト (海岸部)



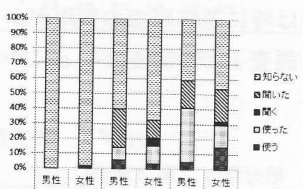
9. クロブシ (全道)



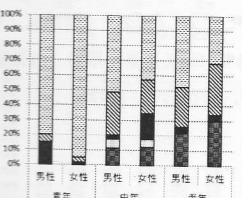
10. クロブシ (海岸部)



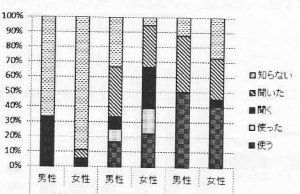
11. スツカイ (全道)



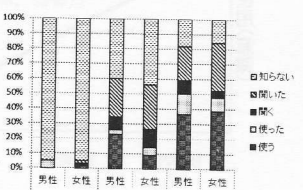
12. カテル (全道)



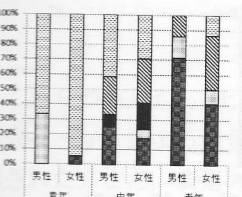
13. タナク (全道)



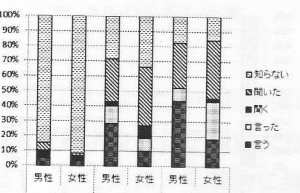
14. タナク (海岸部)



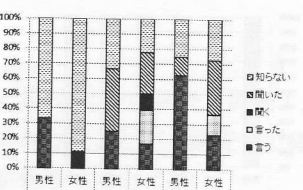
15. ヤバチー (ヤバシー) (全道)



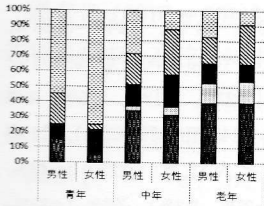
16. ヤバチー (ヤバシー) (海岸部)



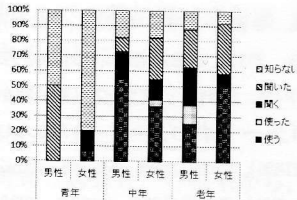
17. ホイト (全道)



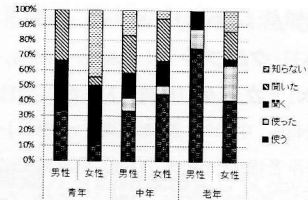
18. ホイト (海岸部)



19. オガル (全道)

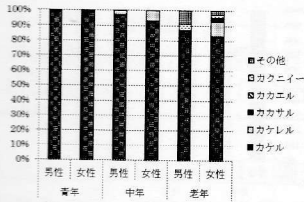


20. オガル (内陸部)



21. オガル (海岸部)

文法：カケレル (書くことができる) [老6%, 中5%, 若0%]



22. カケレル (全道)

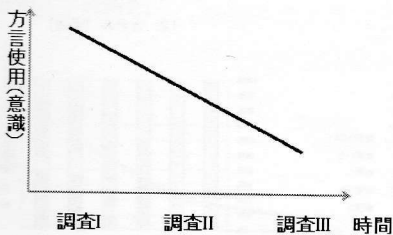
本類型では、唯一カケレルが調査Ⅱ－aからの予測どおりにはならなかった。調査Ⅰ時点では「全道的によく使われている」とされ、調査Ⅱ－aでは「全般的に減少したがなお全道的に使う」「本州でも広がりつつある新型」とみなされたが、本調査Ⅲの結果から、その後の四半世紀で受け継がれることはなくほぼ死語化していることが分かる。衰退には地域差も見られない。

Ⅰ－B. 「漸次衰退」項目：調査Ⅰから調査Ⅲにかけて衰退が徐々に、かつ着実に進行。調査Ⅲでは特に若年層での使用がかなり少ない。

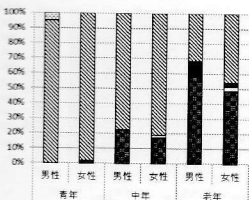
調査Ⅰから調査Ⅱ－aにかけて微減が見られた項目。

タイプⅠ 衰退型

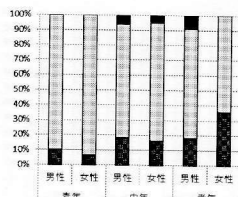
細分類ⅡB 「漸次衰退」



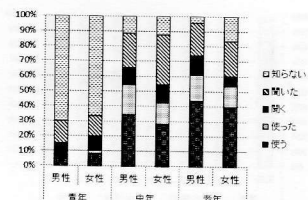
語彙：アク (灰) [老52%, 中20%, 若2%]・シバレル ([池の水が] 凍る) [老30%, 中17%, 若8%]・ハッチャキニナル (一生懸命になる、思い切り頑張る) [老41%, 中32%, 若8%]・アメル (腐る) [老70%, 中54%, 若14% (知らないm55%, f65%)] ※海岸老 (m89%, f72%), 中 (m42%, f77%), 若m33%, f22%]



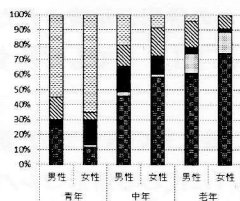
23. アク (全道)



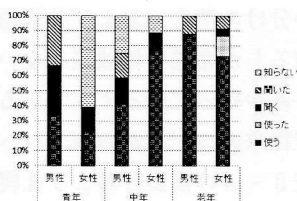
24. シバレル (全道)



25. ハッチャキニナル (全道)

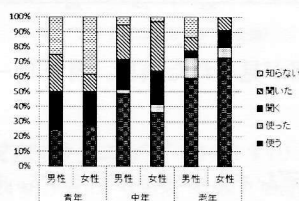


26. アメル (全道)

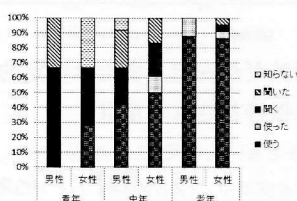


27. アメル (海岸部)

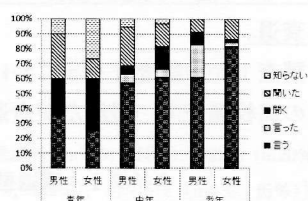
ユルクナイ (楽でない) [老68%, 中42%, 若25% ※海岸老87%, 中47%, 若24%]・**アズマシー** (気楽だ, 心地よい, ゆったりしている) [老75% (m61%, f82%), 中60% (m57%, f61%), 若29% (m35%, f25%) ※海岸老80% (m88%, f77%), 中77% (m75%, f78%), 若33% (m0%, f39%)]・**ナンボ** (いくら) [老22% (m30%, f19%), 中27% (m42%, f18%), 若13% (m20%, f10%)]・**ヤム** (歯が痛む) [老55%, 中45%, 若20%]・※ (本調査のみ) **ヤッパシ** (やはり) [老42%, 中26%, 若15%]



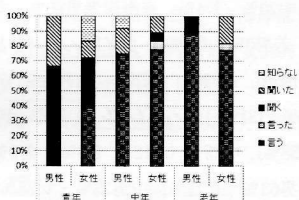
28. ユルクナイ (全道)



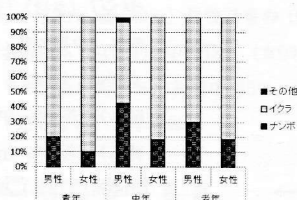
29. ユルクナイ (海岸部)



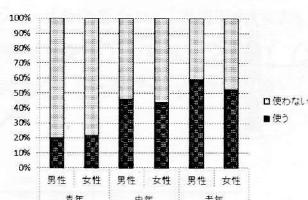
30. アズマシー (全道)



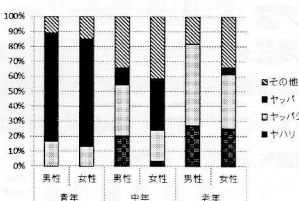
31. アズマシー (海岸部)



32. ナンボ (全道)

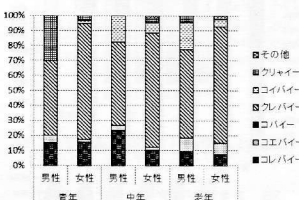


33. ヤム (全道)

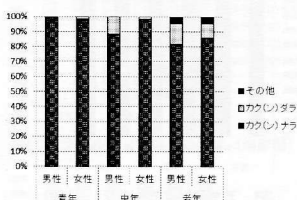


34. ヤッパシ (全道)

文法: コイバ (コエバ) (来れば) [老18% (m27%, f15%), 中13% (m21%, f10%), 若4% (m5%, f4%)]・**カク (ン) ダラ** (書くなら) [老11% (m14%, f10%), 中5% (m12%, f2%), 若1% (m0%, f2%)]



35. コイバ (コエバ) (全道)



36. カク (ン) ダラ (全道)

これらの結果から, 上記 I - A と同様, 「見かけ上の時間」仮説に基づいた二つの調査 (調査 I, 調査 II - a) による消長の判別, および将来の変化予測が大方妥当であったことが本調査 III で確認された。また, 衰退の進度は上記 I - A と同様, 全般的に海岸部が他地域に比べ遅い。

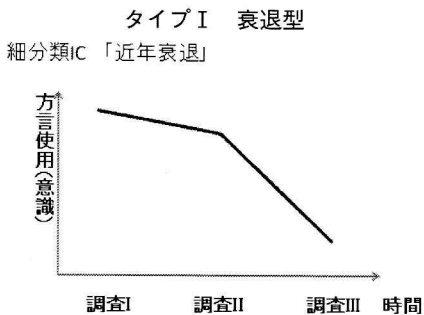
ただし, (池の水が) **シバレル** について, 調査 II - a 時点では, 「水 (池など) の凍結」と「固

形物(手拭いなど)の凍結」の使い分けの消失, および共通語形「凍る」との併用が示唆されたが, 四半世紀後(調査Ⅲ)には「凍る」が席卷。地域差もない。しかし, 以下Ⅰ-Ⅲでも言及するが, 固形物への使い分け意識は, 多少残っているようである。

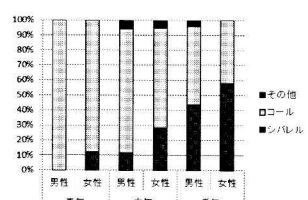
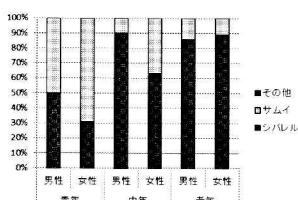
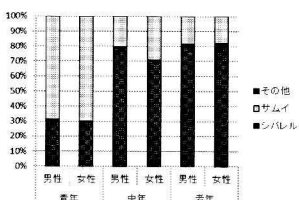
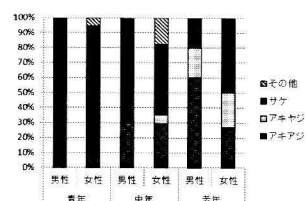
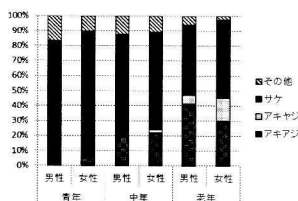
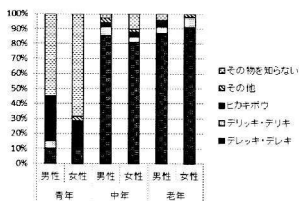
コイバ・コエバについて, 調査Ⅰで従来のコイバからコエバへの乗り換え, 特に若い男女での「新方言的伸び」が指摘されたが, 調査Ⅱ-aの富良野および札幌調査でコエバに代わる新形コレバが若い世代で進出。調査Ⅱ-bでもコレバは「新方言」と特定。しかし, 本調査Ⅲからは, コイバ・コエバともに若い世代でほぼ死語化していることが分かる。また, 新方言コレバ(以下タイプⅢ-C参照)の勢力はその後それほど伸びることはなく, それに代わるクチャー(以下タイプⅡ-B参照)の新勢力が特に若い男性の間で著しい。

Ⅰ-Ⅲ. 「近年衰退」項目: 調査Ⅰ, 調査Ⅱ-a時点ではともに隆盛だったが, 調査Ⅲで急激に衰退。

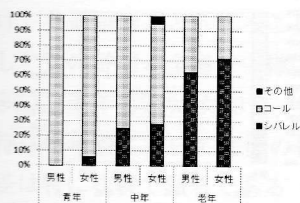
調査Ⅰから調査Ⅱ-aにかけて微減だが安定, または安定的な使用が見られた項目。調査Ⅱ-aの高校調査で, 微減だが全道的に保持とされた項目。



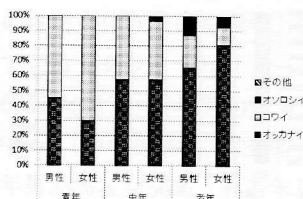
語彙: デレッキ (デレキ) (火掻き棒) [老89%, 中81%, 若10% (知らない m55%, f68%)]・アキヤジ (アキヤジ) (さけ) [老39%, 中20%, 若4% ※海岸老男80%・女50%, 中男33%・女35%, 若男0%・女6%]・シバレル (ひどく寒い) [老82% (内陸 m86%, f89%), 中75% (内陸 m90%, 63%), 若30% (内陸 m50%, f31%)]・シバレル ([手拭いが] 凍る) [老53% (m43%, f58%), 中22% (m12%, f28%), 若9% (m0%, f12%) ※海岸老男63%・女71%, 中男25%・女28%, 若男0%・女6%]・オッカナイ (おそろしい) [老72%, 中53%, 若33%]・オバンデス (こんばんは) [老25%, 中7%, 若2%]・コワイ (コワカタ) (疲れた, くだびれた) [老84%, 中76%, 若23% ※海岸老90%, 中87%, 若38% (m0%, f44%)]・トーキビ (とうもろこし) [老76% (m81%, f74%), 中52% (64%, f46%), 若28% (m30%, f27%)]



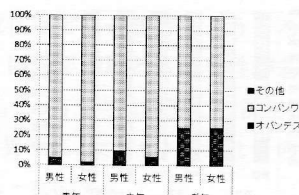
北海道方言の共通語化・新方言の半世紀後の様相



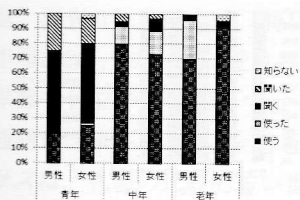
43. シバレル (海岸部)



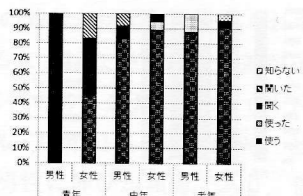
44. オッカナイ (全道)



45. オバンデス (全道)

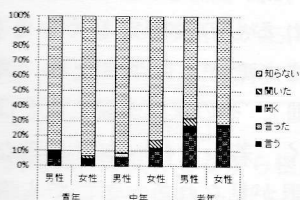


46. コワイ (コワカタ) (全道)

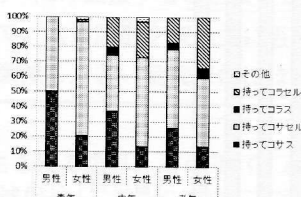


47. コワイ (コワカタ) (海岸部)

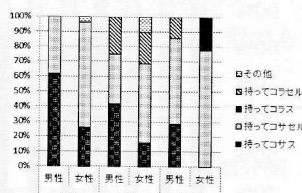
文法: カクニイ (書きやすい) [老26%, 中8%, 若4%]・コラセル (来させる) [老28% (m17%, f34%), 中22% (m20%, f24%), 若1% (m0%, f2%)] ※海岸部老年43% (m13%, f55%), 中年33% (m25%, f39%), 若年5% (m0%, f6%)]・コラス (来させる) [老6%, 中3%, 若0%]・タベラセヨ (食べさせよう) [老15% (m13%, f16%), 中14% (m9%, f15%), 若4% (m5%, f3%)] ※海岸部老年16%, 中年20%, 若年0%]・男性話者の (勉強) シレ (命令形シロ) [老男9% (女2%), 中男12% (女0%), 若男5% (女3%)] ※内陸老男14% (女0%), 中男18% (女0%), 若男0% (女7%)]・(勉強) シレバ (シリヤー) (すれば) [老3%, 中9%, 若0%] ※内陸中男27%, 札幌中男3%, 海岸中男3%]・フラフサッタ (自発) [老70%, 中58% (m40%, f67%), 若32%] ※「知らない」若年55%]



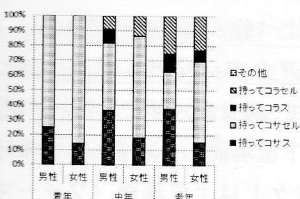
48. カクニイ (全道)



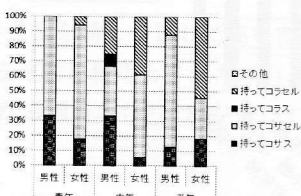
49. コラセル・コラス・コサス (全道)



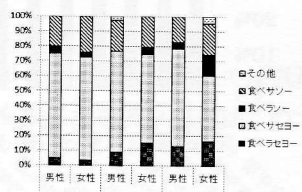
50. コラセル・コラス・コサス (札幌市)



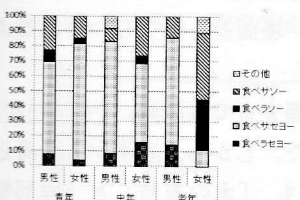
51. コラセル・コラス・コサス (内陸部)



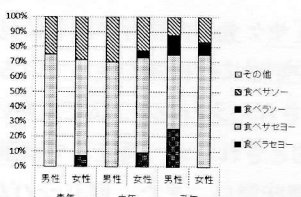
52. コラセル・コラス・コサス (海岸部)



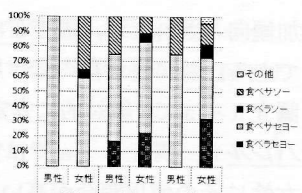
53. タベラセヨ (全道)



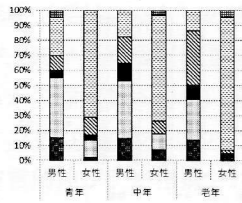
54. タベラセヨ (札幌市)



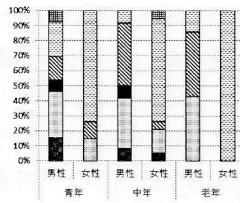
55. タベラセヨ (内陸部)



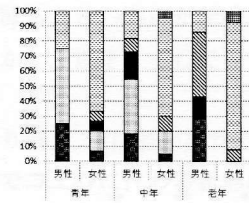
56. タベラセヨ (海岸部)



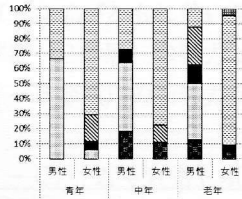
57. シレ (全道)



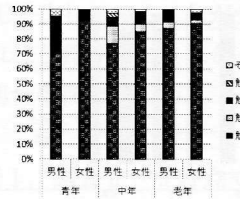
58. シレ (札幌市)



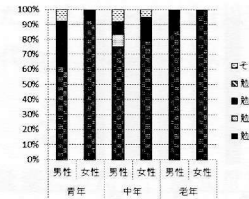
59. シレ (内陸部)



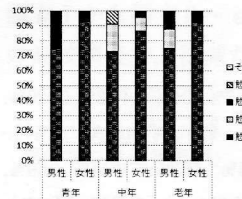
60. シレ (海岸部)



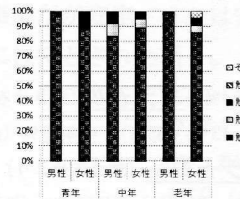
61. シレバ (シヤァー) (全道)



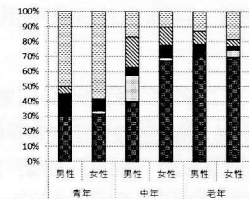
62. シレバ (シヤァー) (札幌市)



63. シレバ (シヤァー) (内陸部)

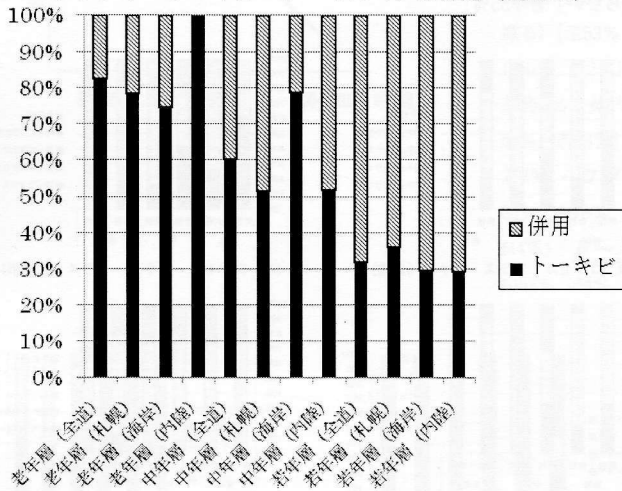


64. シレバ (シヤァー) (海岸部)



65. ワラワサッタ (全道)

グラフ1 トーキビ・トーモロコシの併用 (調査Ⅲ)



これらの項目は、調査Ⅱ－a 時点では「衰退の兆しが見られるものの安定している」とされたが、四半世紀後（調査Ⅲ）、その状況が続くことはなく、若い世代へ向け急激な衰退が見られる。ここでも海岸部での衰退の進捗は他地域に比べ若干だが遅めである。

アキアジ (アキヤジ) について、調査Ⅱ－a で「アキアジ」は下位場面（インフォーマル）、「サケ」は上位場面（フォーマル）と場面による使い分けが

増加傾向とされたが、調査Ⅲでは「サケ」への移行が顕著に見られ、場面差も消失しつつあるようである。特に海岸部の老年層・中年層には根強く残っている。

調査Ⅱ－a で「絶対的に安定」とされたシバレル（ひどく寒い）も調査Ⅲでは激減。(手拭いが) シバレルも、調査Ⅱ－a では安定的とされたが、調査Ⅲでは激減した。しかし、家事がより身近な女性にその使用割合が高いのは興味深い。また、同じシバレルでも、「水の凍結」と「固形物の凍結」では、前者の衰退がより速かったと言える（タイプⅠ－B）。

同様に、調査Ⅱ－a 時点で「絶対的に安定」と見られたトーキビも、調査Ⅲでは若い世代へ向

け、共通語形「とうもろこし」との併用を伴う衰退を示す。若い世代ほど共通語形「とうもろこし」との併用が全道で一様に増えている（グラフ1）。「トーキビ」は各年齢層ともに男性が若干多い（老年男74%,女70%;中年男60%,女44%;若年男30%,女25%）。一方、共通語形との併用は、特に中年層において女性の使用が多い（中年男26%,女39%;若年男55%,女57%）。これらの性差は特に札幌で顕著である（札幌中年男33%・女56%,札幌若年男38%・女62%）。

海岸部起源のコラセルは、調査Ⅱ-a時点で全道に使用域が拡大したが、調査Ⅲでは急激に衰退。調査Ⅱ-a時点で、特に札幌の若者が採用したと見られているが（調査Ⅲ時点では、札幌中年層23%）、次世代に受け継がれることはなかった。性差が見られ、女性の多用が特に全道、海岸部で目立つ。調査Ⅲではそれに代わり、新形コサス（以下タイプⅡ-C参照）が登場し、共通語形「来させる」（全道老年48%・中年51%・若年69%）との併用が盛んと見られる。特にコサスは、札幌の比較的若い世代の男性に伸びが顕著であり、他地域の男性もそれに続く（札幌若男62% [女26%], 札幌中男42% [女16%], 札幌老男29% [女0%]）。

同じく海岸部起源のタベラセヨーも上記コラセルの状況は酷似している。どちらかというと、女性が多く使う。調査Ⅲにおいては、若い世代での新形タベサソー（以下タイプⅡ-C参照）が広まり（全道若年23%, 中年20%, 老年20%）、共通語形「食べさせよう」と併用されている。しかし、男女差は海岸部を除きそれほど大きくはない。

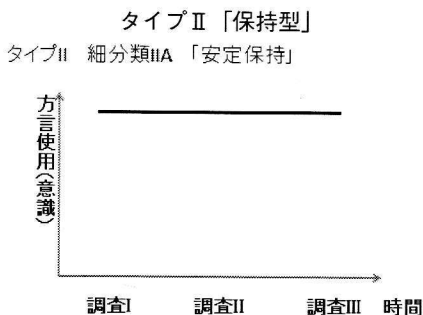
男性話者を中心とした（勉強）シレは、調査Ⅰ時点で、（勉強）スレと同様、「北海道共通語と断じていい」と指摘され、調査Ⅱ-aでは、シレが富良野で、スレは札幌でと使用の地域差が指摘された。四半世紀後の調査Ⅲでシレは、富良野が属する内陸部の老・中年男性で勢力が確認できるのみで他地域までは及ばず、スレ（以下タイプⅡ-C参照）は札幌の老・中年男性を中心に根強く残っている程度で、若い世代へ向け拡張することはなかった。それに代わり、新形シナ（以下タイプⅢ-A参照）が主に女性で、共通語形シロは主に男性で台頭が見られる。派生形であるシレバ（シリヤー）も調査Ⅲでは激減し、若い世代ではほぼ死語化している。

タイプⅡ「保持型」

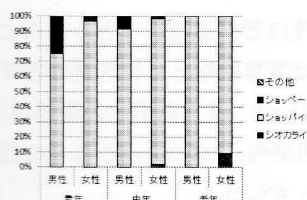
共通語化と共存しながら根強く生き残る項目。そのサバイバルパターンからさらに3細分類：Ⅱ-A「安定保持」・Ⅱ-B「微減保持」・Ⅱ-C「中・小規模保持」を設定。

Ⅱ-A. 「安定保持」項目：この半世紀を通し一貫して高い割合で保持。

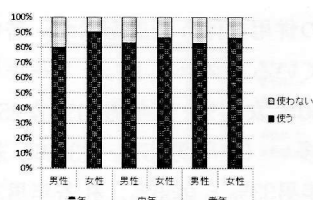
調査Ⅰから調査Ⅱ-aにかけて安定的な使用とされた項目。調査Ⅱ-aの高校生調査では微減だが全道的に保持されているとされる項目。（使用が安定していても性差が顕著な項目はこのカテゴリーに含めない。）



語彙：シヨツパイ（塩辛い）[老94%, 中95%, 若91%]・ナゲル（捨てる）[老85%, 中85%, 若87%]



66. ショッパイ (全道)



67. ナゲル (全道)

文法：該当なし。

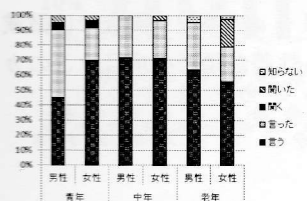
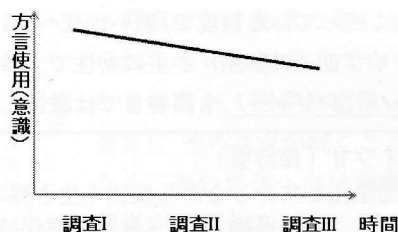
ショッパイ・ナゲルともに、「テレビに出てアナウンサーと話すとしたら」に対し「使う」との回答が多いことから、方言意識は弱いと判断できる。典型的な北海道共通語。

Ⅱ－B. 「微減保持」項目：この半世紀で微減は見られるが、比較的高い割合で保持。徐々に共通語項目への移行が見られる項目。

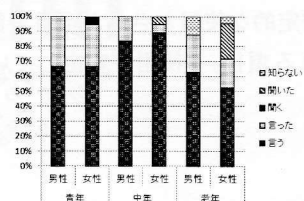
調査Ⅰから調査Ⅱ－a にかけて微減だが安定的、または安定した使用とされた項目。調査Ⅱ－a の高校生調査では微減だが全道的に保持されているとされた項目。(使用が安定していても性差が顕著な項目はこのカテゴリーに含めない。)

語彙：バクル (交換する) [老59%, 中72%, 若63% (m45%, f70%)] ※海岸部老55%, 中87%, 若67%]・メンコイ (かわいい) [老83% (m86%, f82%), 中71% (m74%, f69%), 若70% (m50%, f77%)] ※海岸老87% (m100%, f82%), 中87% (m75%, f94%), 若86% (m67%, f89%)]・カジル (かみつく) [老73% (m68%, f75%), 中76% (m71%, f81%), 若55% (m50%, f60%)]

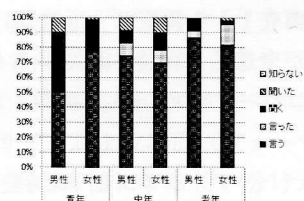
タイプⅡ「保持型」
タイプⅡ 細分類ⅡB 「微減保持」



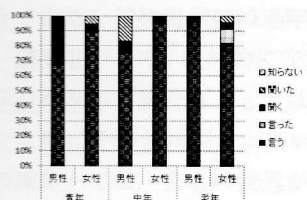
68. バクル (全道)



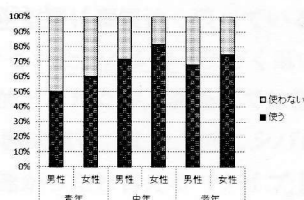
69. バクル (海岸部)



70. メンコイ (全道)

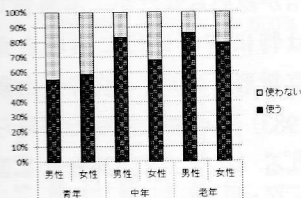


71. メンコイ (海岸部)

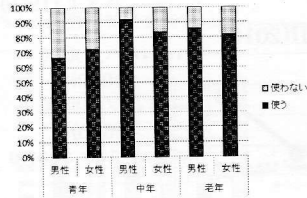


72. カジル (全道)

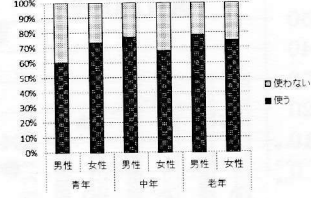
ミッタクナイ (みにくい) [老81%, 中73%, 若58% ※海岸老80%, 中87%, 若71%]・カッチャク (ひっかく) [老76%, 中72%, 若69% ※海岸老80%, 中77%, 若76%, ※内陸老76%, 中67%, 若84%]・シャッコイ (ヒャッコイ) (冷たい) [老49%, 中58%, 若54% ※札幌若45% (m54%, f40%), 内陸若59% (m25%, f69%), 海岸若68% (m67%, f69%)]・(手袋を) ハク (はめる) [老86%, 中83%, 若69%, ※スル: 札幌若年m15%, f22%]



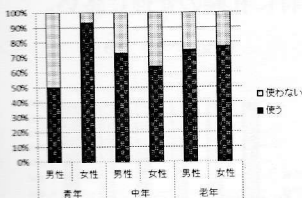
73. ミッタクナイ (全道)



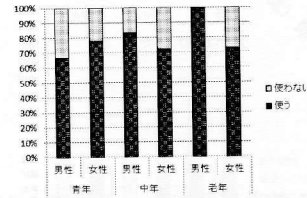
74. ミッタクナイ (海岸部)



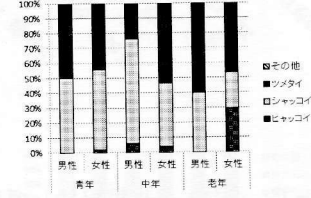
75. カッチャク (全道)



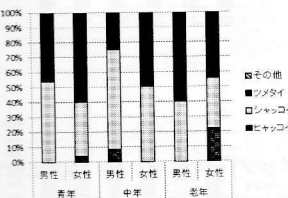
76. カッチャク (内陸部)



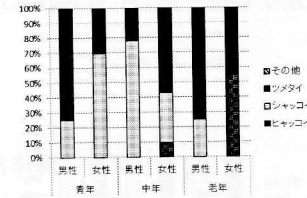
77. カッチャク (海岸部)



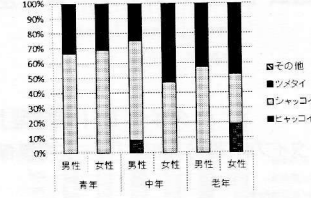
78. シャッコイ (ヒャッコイ) (全道)



79. シャッコイ (ヒャッコイ) (札幌市)

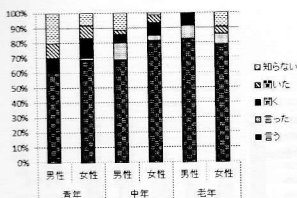


80. シャッコイ (ヒャッコイ) (内陸部)



81. シャッコイ (ヒャッコイ) (海岸部)

文法: カカサラナイ (状況可能の否定) [老80%, 中77%, 若67%]



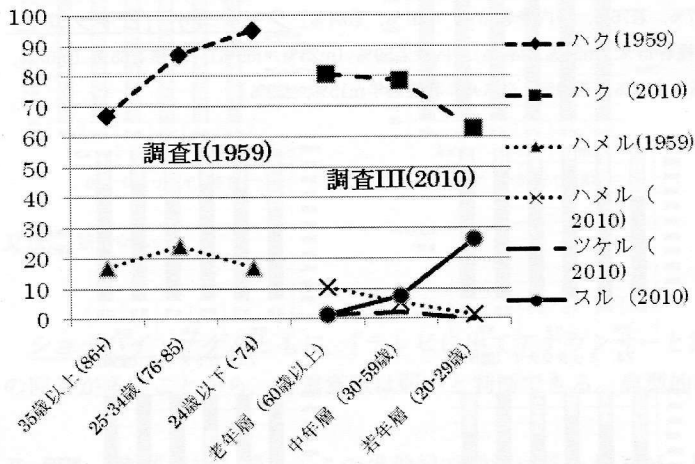
82. カカサラナイ (全道)

これらの項目は、調査Ⅱ-aで「衰退の兆しはあるものの安定して使用」とされ、調査Ⅲでもその状況が続く。本調査Ⅲで、これらの項目についてはどれも、「テレビに出てアナウンサーと話すとしたら」に対し「使わない」との回答が多いことから方言意識は強いと思われる。

メンコイは、北海道特有の存在意義があり(調査Ⅱ-a), 調査Ⅲでもそれが継承か。特に海岸部で根強い。

道場(1994)による札幌市内の高校生調査からシャッコイ (ヒャッコイ)には性差(女性の多用)が見られたが、調査Ⅲでは性差が薄まった感がある。

グラフ2 「(手袋を) ハク」の経年変化：調査Ⅰ（1959）vs. 調査Ⅲ（2010-11）



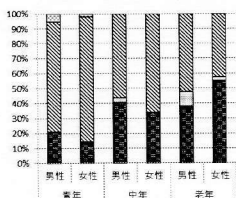
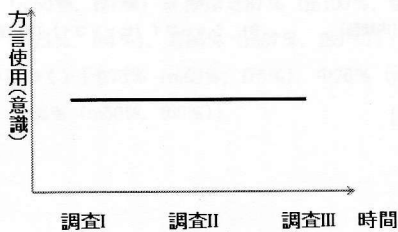
(手袋を) ハクは、調査Ⅰ・調査Ⅱ - a ともに安定的な使用が認められたが、本調査では特に若い世代における東京新形「スル」(荻野・山敷1983)への漸次的移行が見られる(グラフ2, 調査ⅠとⅢの比較のみ)。「スル」の使用は特に札幌の女性に多い。

Ⅱ - C. 「中・小規模保持」項目：この半世紀で中・小規模ながらも、比較的安定的に保持。
過去半世紀において、地域差や性差などが一貫して見られる項目。

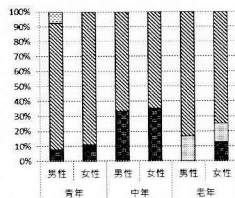
タイプⅡ「保持型」

タイプⅡ 細分類ⅡC 「中・小規模保持」

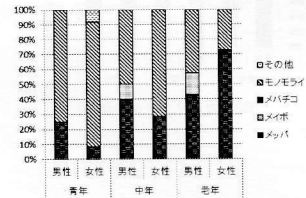
語彙：海岸部のメツバ^①(ものもらい) [海岸老62% (m63%, f62%), 中45% (m50%, f39%), 若33% (m100%, f25%)]



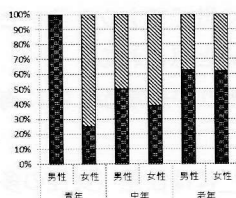
83. メツバ (全道)



84. メツバ (札幌市)

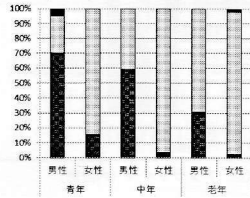


85. メツバ (内陸部)

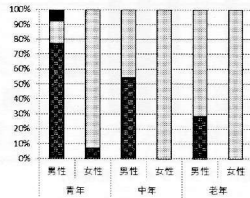


86. メツバ (海岸部)

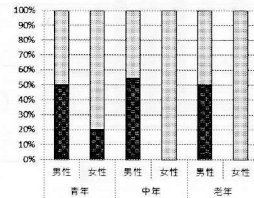
文法：男性話者のイクベ（勧誘）〔老男30%（女2%），中男57%（女3%），若男70%（女15%）※札幌若男77%，内陸若男50%，海岸若男67%〕・男性話者のカクベ（推量）〔老男22%（女2%），中男34%（女2%），若男60%（女5%）※札幌若男62%，内陸若男50%，海岸若男67%〕※カクダロウ〔老30%（m48%，f20%），中24%（m31%，f19%），若6%（m0%，f9%）〕・（勉強）スレ（しろ）〔老13%（m35%，f2%），中12%（m17%，f8%），若11%（m10%，f12%）※札幌若男15%・女11%，内陸若男0%・女7%，海岸若男0%・女17% ※札幌中男42%，内陸中男9%，海岸中男0%〕・男性話者のオキレ（起きろ）〔老男43%（女9%），中男60%（女10%），若男75%（女10%）〕



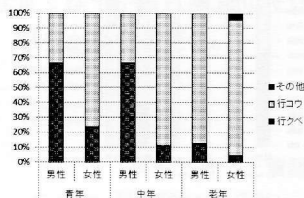
87. イクベ (全道)



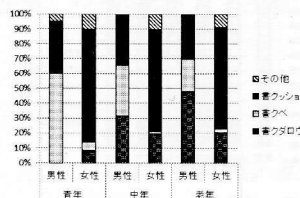
88. イクベ (札幌市)



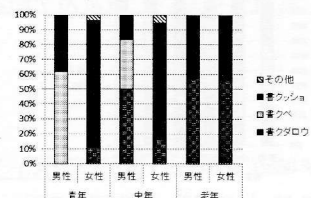
89. イクベ (内陸部)



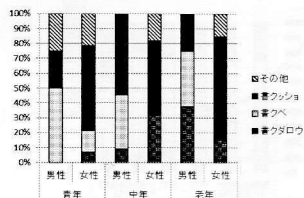
90. イクベ (海岸部)



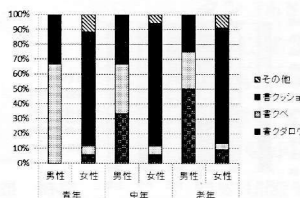
91. カクベ (全道)



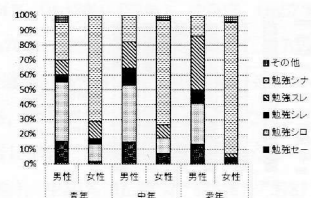
92. カクベ (札幌市)



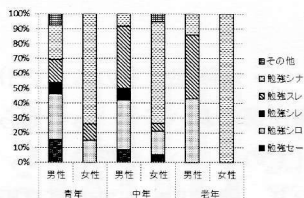
93. カクベ (内陸部)



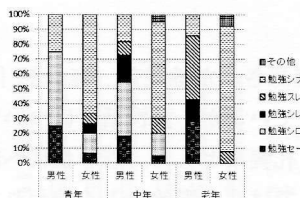
94. カクベ (海岸部)



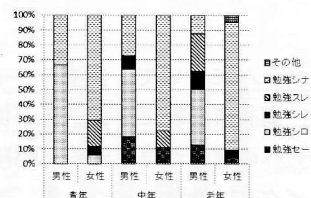
95. スレ (全道)



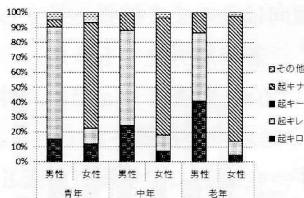
96. スレ (札幌市)



97. スレ (内陸部)

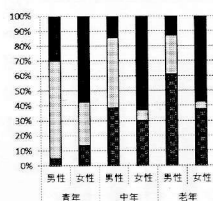


98. スレ (海岸部)

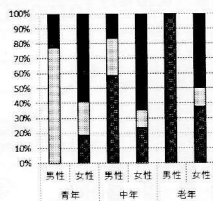


99. オキレ (全道)

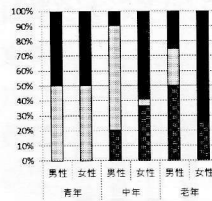
アタラシイベ (質問調) [老13% (m26%, f5%), 中22% (m47%, f7%), 若38% (m65%, f29%)] ※札幌若男77%・女22%, 内陸若男50%・女50%, 海岸若男33%・女22% ※札幌中男25%, 内陸中男70%, 海岸中男50%]・**コサス** (来させる) [老18% (m26%, f14%), 中22% (m37%, f14%), 若28% (m50%, f21%)] ※札幌若男62%・女26%, 内陸若男25%・女14%, 海岸若男33%・女18% ※札幌中男42%, 内陸中男36%, 海岸中男33%]・**タベサソー** (食べさせよう) [老20%, 中20%, 若23%]



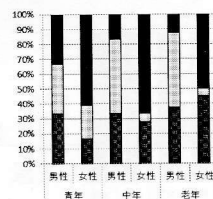
100. アタラシイベ (全道)



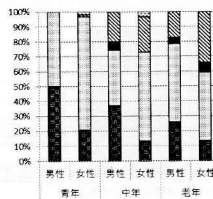
101. アタラシイベ (札幌市)



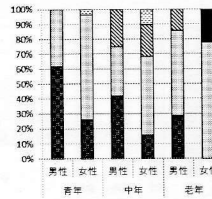
102. アタラシイベ (内陸部)



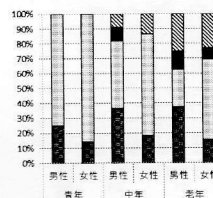
103. アタラシイベ (海岸部)



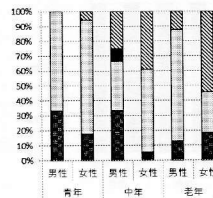
104. コサス (全道)



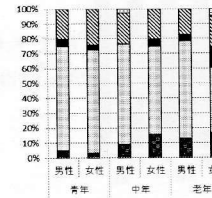
105. コサス (札幌市)



106. コサス (内陸部)



107. コサス (海岸部)



108. タベサソー (全道)

メツパについて、調査Ⅱ-aで確認された地域差(海岸部「メツパ」・内陸部「ものもらい」)は、調査Ⅲで特に男性話者が保持しているが、女性話者については海岸部においても「ものもらい」への移行が見られる。内陸部・札幌市ともに、若い世代へ向け「ものもらい」が席卷する。

イクベ(勧誘)について、調査Ⅰでは「全道的によく使われて」おり、調査Ⅱ-bでも富良野と札幌の若い世代へ向け、使用が増加。高校生調査では全道的に使われており、地域差はないが、性差が顕著とされる(平均35%, 男子62%・女子8%)。調査Ⅲでこの傾向はそのまま拡張。目立った地域差はなく、全道的に中年層(調査Ⅱ当時の若年層)だけでなく、若年層男性でも多用。

カクベ(推量)について、状況は大方上記イクベ(勧誘)と類似しているが、調査Ⅱ-aでは、「仲間用語」として富良野若年男性が札幌若年男性よりも多用するという地域差が指摘されている。しかし、調査Ⅲでは、上記のような都市間・地域間格差は確認できず、全道的に中年層(調査Ⅱ当時の若年層)だけでなく、若年層男性でも多用が見られる。また、調査Ⅱ-a時点で、特に若い女性の間で広まり始めた**カク(ツ)シヨ**(以下タイプⅢ-A)が調査Ⅲでは爆発的に拡張し、男性話者にも波及しつつある。

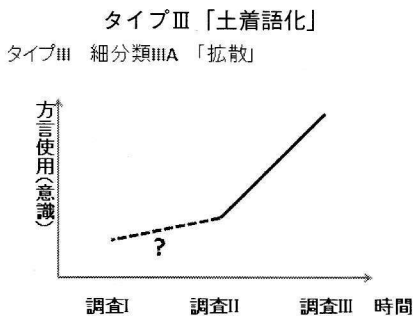
(勉強) スレ (しろ) は、調査Ⅰ時点で「北海道共通語」、調査Ⅱ－aでは特に札幌の若い世代で急速な伸びが指摘された。調査Ⅲでは、札幌中年男性(調査Ⅱ－a)当時の若年層)を中心にスレが保持されており、同地の若年層男女ともに継承されている。また、調査Ⅱ－a高校生調査で、全道で女子中心に広がり始めたシナ(以下タイプⅢ－A)は調査Ⅲで全世代に拡張し、男性話者にも波及しつつある。

オキレは、調査Ⅲでも全道的に広く男性話者による使用が見られる。

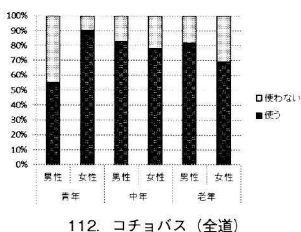
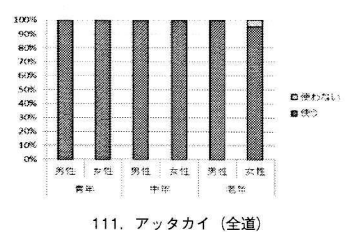
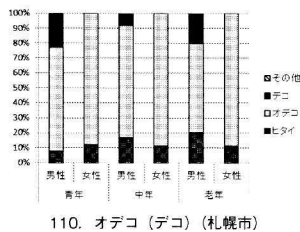
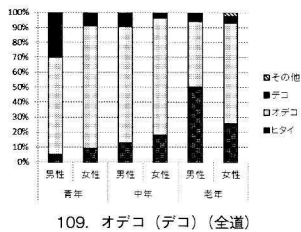
タイプⅢ「土着語化」

共通語化に逆行する方言形の新たな生成と伝播。その伝播のパターンからさらに4細分類:Ⅲ－A「拡散」・Ⅲ－B「中・小規模拡散」・Ⅲ－C「短命」・Ⅲ－D「若年再生」を設定。調査Ⅱ－a, b時期に注目された「新方言」のその後の様相。⁶

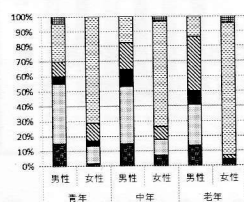
Ⅲ－A.「拡散」項目:調査Ⅱ－a, bで「新方言」として若い世代による生成が指摘され、調査Ⅲでは中年層(調査Ⅱ時点の若年層)のみならず、老年層への伝播や次世代への継承が確認。明らかな言語変化。



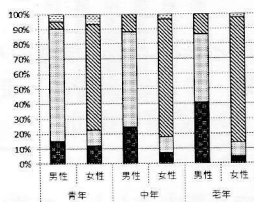
語彙: オデコ (デコ) (額) [老66% (m50%, f72%), 中84% (m87%, f82%), 若92% (m95%, f91%)] ※デコ [老男6%, 中男10%, 若男30%]・アオタン (あざ) [老24% (m17%, f27%), 中60% (m57%, f61%), 若79% (m70%, f82%)] ※内陸老14%, 中70%, 若84%, ※アザ-全道老57%, 中24%, 若14% ※ブスイロ海岸老7%, 中23%, 若0%]・アッタカイ (あたたかい) [老97%, 中100%, 若100%]・コチョバス (くすぐる) [老73% (m82%, f69%), 中80% (m83%, f78%), 若81% (m55%, f90%)]



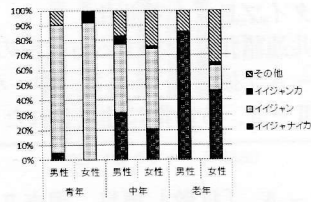
文法:(勉強) シナ (しろ) [老63% (m14%, f88%), 中51% (m18%, f70%), 若60% (m25%, f71%)]・オキナ (起きろ) [老60% (m14%, f84%), 中55% (m12%, f79%), 若54% (m5%, f71%)]・イイジャン (いいじゃないか) [老10% (m0%, f16%), 中50% (m46%, f53%), 若90% (m85%, f92%)]※札幌中年男42%女53%, 内陸中年男64%女62%, 海岸中年男33%女44%]・カク(ツ) ショ (書くだろう(推量)) [老55% (m30%, f68%), 中55% (m34%, f68%), 若65% (m35%, f76%)]※札幌中年男17%・女78%, 内陸中年男55%・女50%, 海岸中年男33%・女82%]・(念押し)の 行く(ツ) ショ (行くでしょ?) [老66% (m52%, f73%), 中82% (m71%, f88%), 若94% (m95%, f93%)]・(牛) ミタク ((牛)のように) [老71%, 中81%, 若91%]・ケド (けれども, けれど) [老55%, 中75%, 若88%]



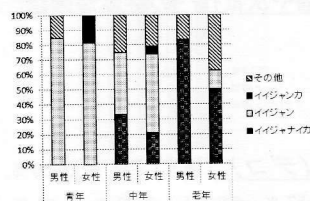
113. シナ (全道)



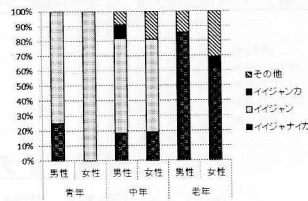
114. オキナ (全道)



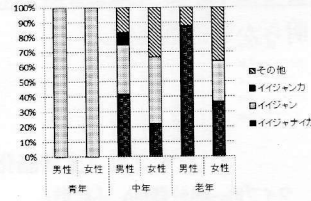
115. イイジャン (全道)



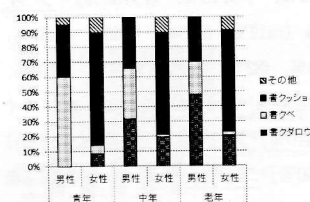
116. イイジャン (札幌市)



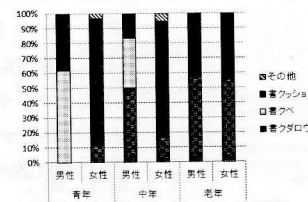
117. イイジャン (内陸部)



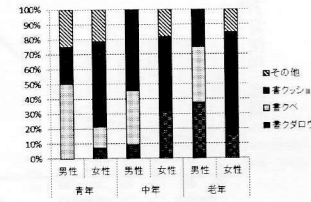
118. イイジャン (海岸部)



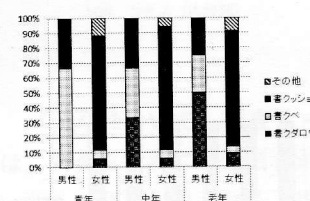
119. カク(ツ) ショ (全道)



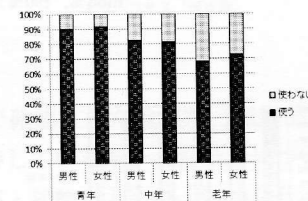
120. カク(ツ) ショ (札幌市)



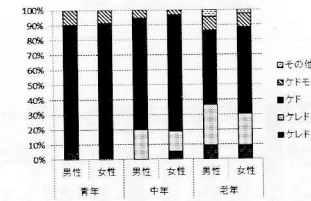
121. カク(ツ) ショ (内陸部)



122. カク(ツ) ショ (海岸部)



123. ミタク (全道)

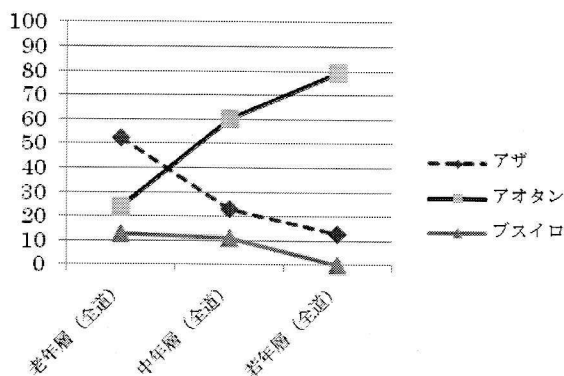


124. ケド (全道)

オデコは, 1990年代の札幌市内高校生による使用が平均76% (男66%, 女83%) であったが (道場1994), 次世代にもひき継がれている。デコも若年層男性で全道的に増えている。

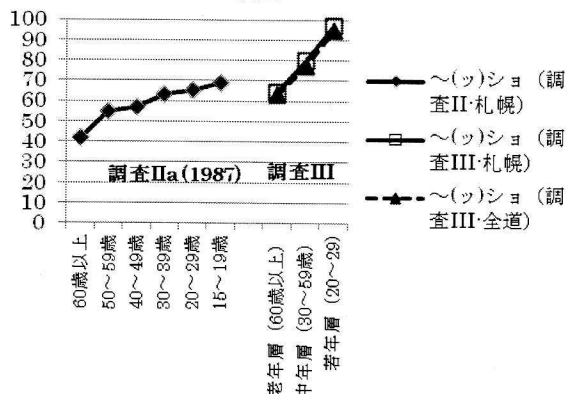
アオタンは若い世代へ向け, 共通語形「あざ」を駆逐し, 地域差もなくほぼ北海道共通語と言える (グラフ3)。また, テレビに出てアナウンサーと話すとしたら」に対し「使う」との回答が多いことから方言意識も弱いと言える。一方, コチヨバスについては, 「テレビに出てアナウンサーと話すとしたら」に対し「使わない」との回答が多いことから, 方言意識は強いと思われるが, 地域差がなく全道で全世代にわたり使用されている。特に若年層では女性の使用が多い。

グラフ3 アオタン (調査Ⅲ)



上掲タイプⅡ-Cで言及したように、(勉強) シナ・オキナ・カク(ツ) ショ (推量) は、調査Ⅱ時期に若い女性を中心に使われ始め、調査Ⅲでは、中年層 (調査Ⅱ時代の若年層) のみならず他世代にも波及。地域差もほとんど見られない。特にカク(ツ) ショ (推量) は、道場 (1994) による札幌市内高校生調査で顕著な性差が指摘されたが (男7%, 女48%), 調査Ⅲでは一般的に若年層の男性も使うようになってきている。

グラフ4 念押しの「イク(ツ) ショ」(行くでしょ?): 調査Ⅱ vs. 調査Ⅲ



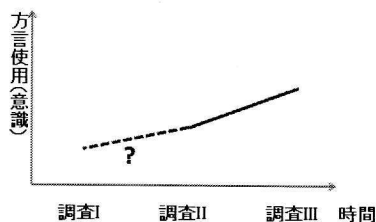
(念押しの) 行く(ツ) ショ (行くでしょ?) について、調査Ⅱ-aで札幌における年齢との規則的相関が明らかにされた (グラフ4)。高校生調査でも、若干の性差は見られるものの、「全道に広がる」新方言と指摘 (全道平均75%, 男63%, 女86%)。調査Ⅲでは、札幌のみならず、全道規模で全世代での使用が拡大したと見られる。特に若い世代では圧倒的的支持。性差はなくなり男女共用となった。

ケドは、首都圏新方言とされる項目 (河崎・井上1983)。調査Ⅲでは、若い世代へ向け着実な広がりを示す。

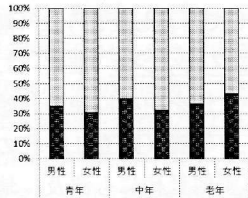
Ⅲ-B. 「中・小規模拡散」: 調査Ⅱ-a, bで若い世代による生成が指摘され、調査Ⅲでは中・小規模ながら中年層 (調査Ⅱ時点の若年層) のみならず、他世代への伝播が確認。

タイプⅢ 「土着語化」

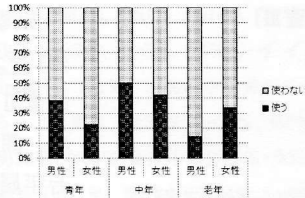
タイプⅢ 細分類ⅢB 「中・小規模拡散」



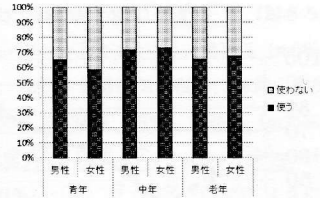
語彙: コチョバイ類 (コチョバシー・コンバイ) (くすぐったい) [老41% (m44%, f36%), 中48% (m54%, f47%), 若46% (m28%, f54%)] ※札幌老38%, 中57%, 若46%]・ネッパル (ねばる) [老41% (m36%, f43%), 中35% (m40%, f32%), 若32% (m35%, f31%)] ※札幌老25%, 中45%, 若28%]・イツチョマエ (一人前) [老67%, 中73%, 若60%]・オモシクナイ (おもしろくない) [老23% (m18%, f26%), 中33% (m39%, f30%), 若45% (m50%, f43%)] ※札幌老25%, 中42%, 若45%]・シタラ (そしたら) [老8% (m5%, f10%), 中21% (m24%, f20%), 若42% (m26%, f47%)] ※海岸老男13%, 女14%, 中男18%, 女22%, 若男33%, 女60%]



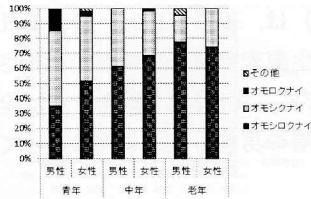
125. ネットボール (全道)



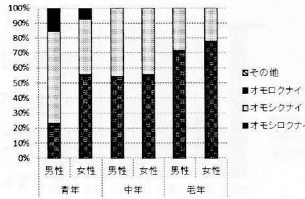
126. ネットボール (札幌市)



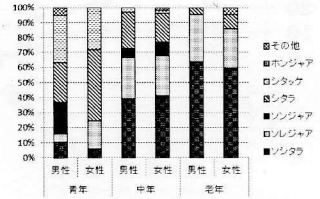
127. イッチョマエ (全道)



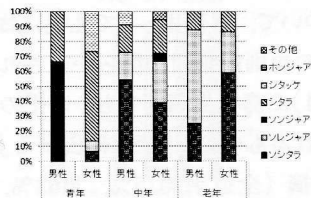
128. オモシロクナイ (全道)



129. オモシロクナイ (札幌市)

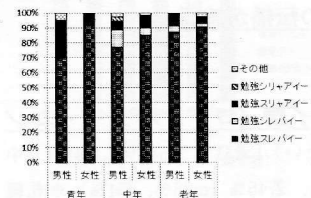


130. シタラ (全道)

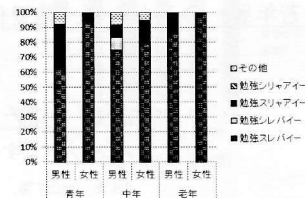


131. シタラ (海岸部)

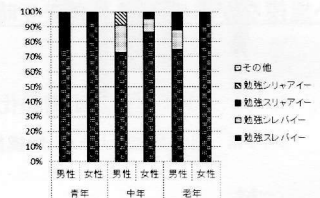
文法：(勉強) スリヤー (すれば) [老6% (m9%, f5%), 中8% (m6%, f8%), 若13% (m25%, f9%)] ※札幌若男31%, 内陸若男25%, 海岸若男0%]・クリヤー (来れば) [老2% (m5%, f0%), 中2% (m0%, f3%), 若10% (m30%, f3%)] ※札幌若男38%, 内陸若男0%, 海岸若男33%]・ワカンネー (わからない) [老8% (m14%, f5%), 中20% (m46%, f4%), 若25% (m55%, f15%)]・海岸部と内陸部での**本バ** (本を) [海岸老17% (m25%, f14%), 中17% (m17%, f17%), 若38% (m33%, f39%), 内陸老10% (m13%, f8%), 中6% (m9%, f5%), 若26% (m0%, f33%)]・**ドコナ無助詞?** (どこに・へ・さ?) [老12% (m13%, f11%), 中25% (m34%, f19%), 若50% (m50%, f50%)]



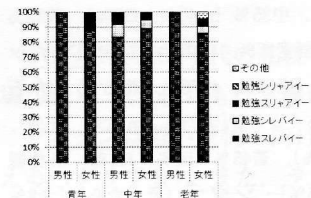
132. スリヤー (全道)



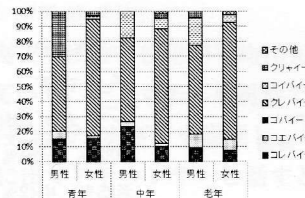
133. スリヤー (札幌市)



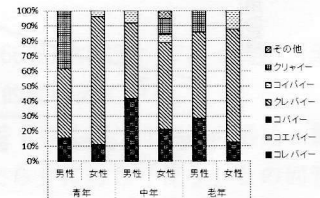
134. スリヤー (内陸部)



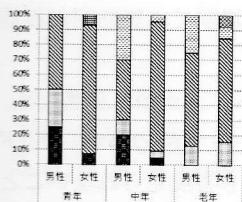
135. スリヤー (海岸部)



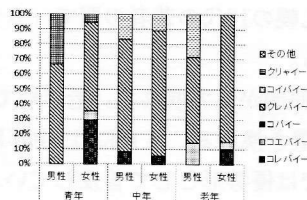
136. クリヤー (全道)



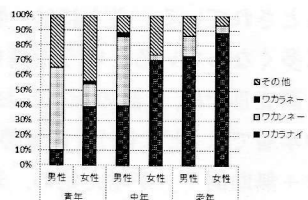
137. クリヤー (札幌市)



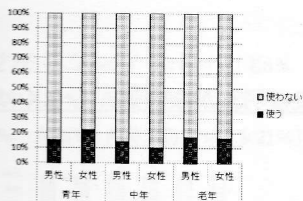
138. クリヤー (内陸部)



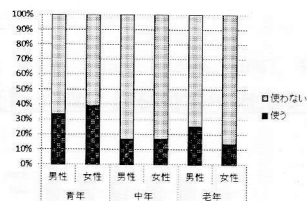
139. クリヤー (海岸部)



140. ワカンネー (全道)



141. 本バ (全道)



142. 本バ (海岸部)

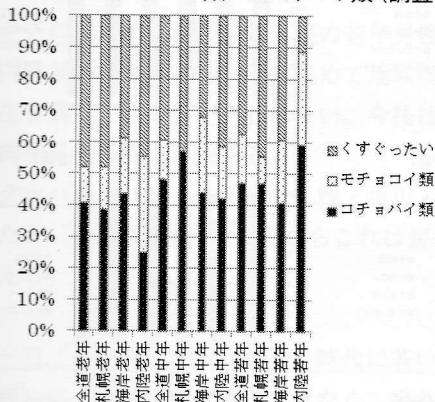
コチョバイ類 (コチョバシ・コソバイ) (グラフ5) は、調査Ⅱ時期に新方言的とされたが (井上1976)、調査Ⅲでは特に中年層 (調査Ⅱ時代の若年層) から若年層へ向け、共通語形「くすぐったい」と勢力をほぼ二分し、明らかな衰退は見られない。大半が「テレビでも使う」と答えていることから地方共通語に向かう項目として、今後も注視すべきと思われる。

オモシクナイは、調査Ⅲで札幌中年層 (42%) と札幌若年層男性 (62%) の多用が目立つ。調査Ⅱ時代の札幌の若者が使い始め、その後も地方も含めた若年層に継承されたのではない。1990年代、札幌の高校生の間では最も優勢な語形 (44%, 男37%, 女49%) とされた (道場1994)。

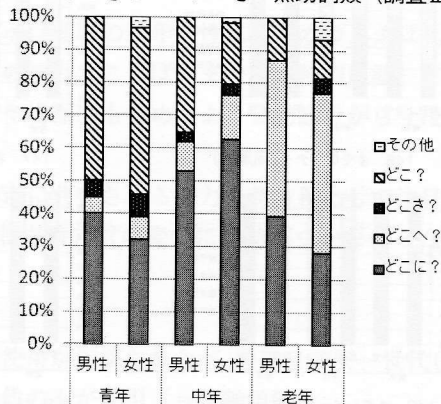
スリヤーについて、調査Ⅱ-aで札幌の若者が先導との指摘があり、調査Ⅲにおいても札幌若年 (特に男性) の高割合からその継承がうかがえる。クリヤーについても同様と思われる。

ドコ+無助詞? (グラフ6) は、『道で親しい友達に、その行先を尋ねるとき、ふつうどう尋ねますか』という問いに対する回答である。調査Ⅱ-aで、方向を尋ねる「エ」はフォーマルな場面 (つまり、より婉曲的)、「ニ」はより直接的で行き着き先や動作の目的を尋ねる具体的質問に使われるとする場面差が指摘されている。これらの場面差は使用割合の年齢差にも反映され、より婉曲的な「エ」は高年齢層に多用され、より直接的な「ニ」は低年齢層に多用される傾向にあ

グラフ5 コチョバイ類・モチョコイ類 (調査Ⅲ)



グラフ6 どこへ・に・さ・無助詞類 (調査Ⅲ)

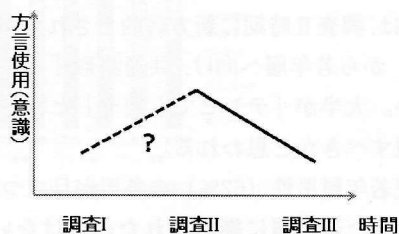


るとされている。さらには、特に札幌の10代の若者の間で、カジュアルな場面での無助詞が極端に多くなっているという指摘もある。

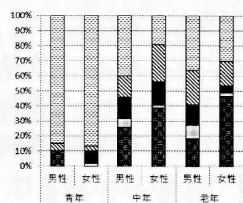
調査Ⅲでは、上記の指摘とおりの傾向が見て取れる。老年層では「どこへ?」が最も優勢だが、中年層では「どこに?」に優勢形が置き換わる。さらには、中年層(調査Ⅱ - a 当時の若者)で「ドコ+無助詞?」が増え始め、若年では優勢形として普及している。地域差も特段見られないことから、調査Ⅱ時代に札幌の若者を中心に始まった変化が、その後、全道の若い世代に広まったのではないかと推察される。

Ⅲ - C. 「短命」項目：調査Ⅱ時点で生成が指摘されたが、調査Ⅲでは明らかな衰退、もしくは死語化が確認。

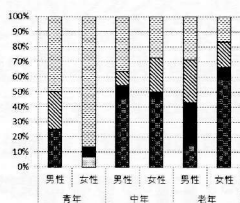
タイプⅢ「土着語化」
タイプⅢ 細分類ⅢC「短命」



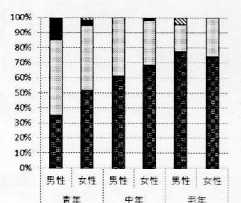
語彙：マテナ(丁寧な) [老37% (m18%, f47%), 中34% (m26%, 39%), 若3% (m10%, f0%) ※内陸老42%, 中46%, 若5%]・オモロクナイ(おもしろくない) [老0%, 中1%, 若6% (m15%, f3%) ※札幌若男15%, 海岸若男33%]・オモシイ(おもしろい) [老8%, 中14%, 若10% ※内陸老10%, 中22%, 若16%]・オモロイ(おもしろい) [老3% (m4%, f2%), 中1% (m3%, f0%), 若7% (m20%, f3%) ※札幌若男31%]・ゲツパ(ゲレ)(びり) [老21% (m13%, f20%), 中28% (m40%, f15%), 若11% (m15%, f8%)]・ケツパル(がんばる) [老2%, 中4%, 若6%]・オッコッタ(落ちた) [老6%, 中15%, 若14%]



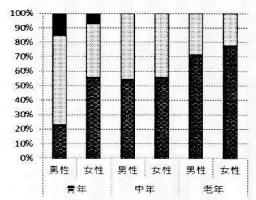
143. マテナ (全道)



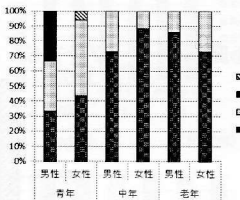
144. マテナ (内陸部)



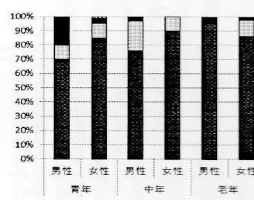
145. オモロクナイ (全道)



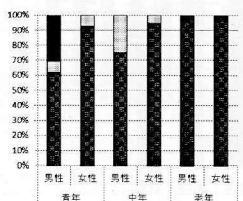
146. オモロクナイ (札幌市)



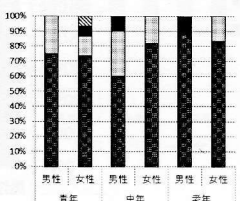
147. オモロクナイ (海岸部)



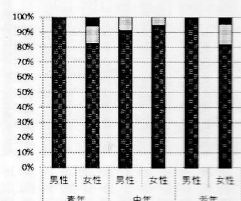
148. オモシイ・オモロイ (全道)



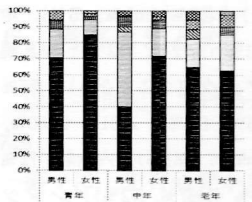
149. オモシイ・オモロイ (札幌市)



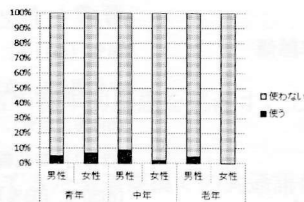
150. オモシイ・オモロイ (内陸部)



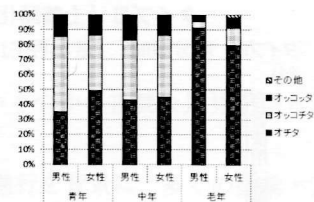
151. オモシイ・オモロイ (海岸部)



152. ゲッパ (ゲレ) (全道)

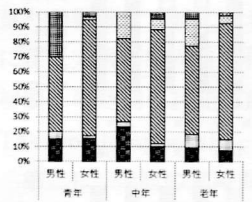


153. ケッパル (全道)

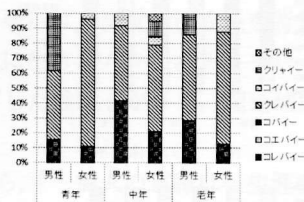


154. オッコッタ (全道)

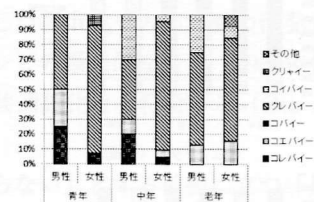
文法：コレバ (来れば) [老8% (m9%, f7%), 中15% (m24%, 10%), 若15% (m15%, f16%)] ※札幌中男42%, 内陸中男20%, 海岸中男8%・チガ Катタ (ちがった) [老6% (m0%, f9%), 中0%, 若14% (m10%, f16%)] ※札幌若男8%, 女23%; 内陸若男25%, 女21%]



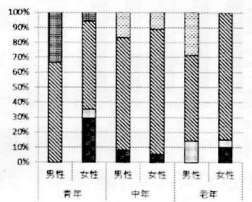
155. コレバ (全道)



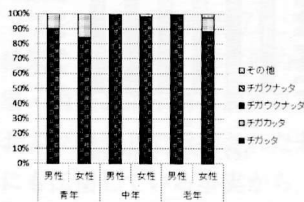
156. コレバ (札幌市)



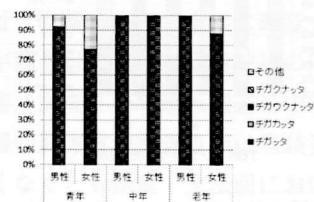
157. コレバ (内陸部)



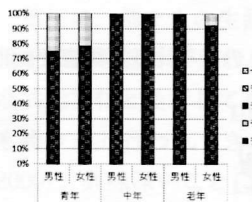
158. コレバ (海岸部)



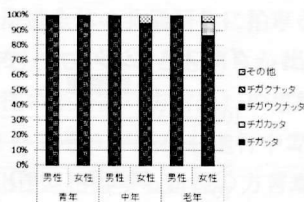
159. チガ Катタ (全道)



160. チガ Катタ (札幌市)



161. チガ Катタ (内陸部)



162. チガ Катタ (海岸部)

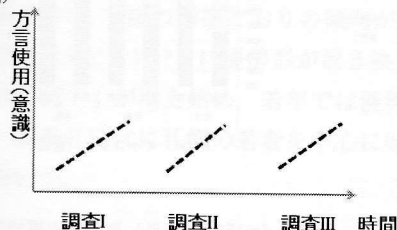
オモロクナイは海岸部と札幌の若年男性に、オモロイは札幌の若年男性に、チガ Катタは札幌と内陸部の男女に、それぞれ極めて地域限定的に一種の流行りことば（または、仲間用語）として生き残っているのかもしれない。今後は、使い分けや場面差も含めたより質的観点から今後の動向を見極める必要がある。

ケッパルは、調査Ⅱ時代、札幌・旭川・網走の3都市に共有される有力な新方言として注目されたが（小野1983）、調査Ⅲからこれは短命に終わり北海道方言の変化には結びつかなかったと言える。

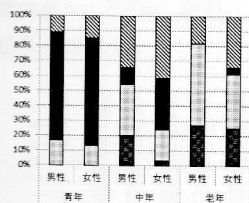
Ⅲ－D.「若年再生」項目：調査Ⅱ時代に若い世代による使用が指摘されたが、調査Ⅲで同一世代（中年層）により継承されることはなく、繰り返し若い世代のみが使用（＝年齢傾斜）。

タイプⅢ「土着語化」

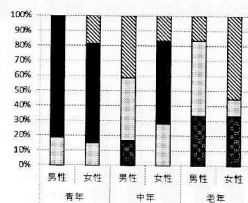
タイプⅢ 細分類ⅢD「若年再生」(＝年齢傾斜)



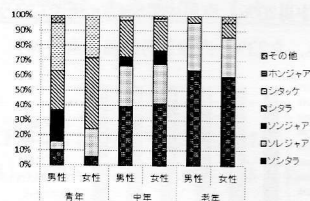
語彙：ヤッパ（やはり）〔老3%（m0%, f5%），中26%（m11%, f34%），若72%（m72%, f72%）〕※札幌中年男0%，女56%・シタツケ（さようなら）〔老5%（m4%, f5%），中16%（m23%, f12%），若81%（m80%, f82%）〕※札幌若年85%（m92%, f81%），内陸若年72%（m50%, f93%），海岸若年70%（m67%, f72%）・シタツケ（そしたら）〔老0%，中2%，若29%〕※札幌若年32%（m42%, 28%），内陸若年29%（m25%, f31%），海岸若年22%（m0%, f27%）〕



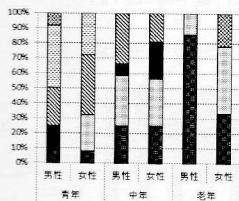
163. ヤッパ (全道)



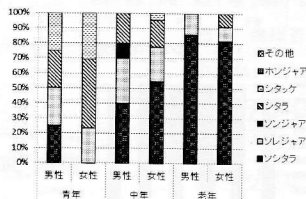
164. ヤッパ (札幌市)



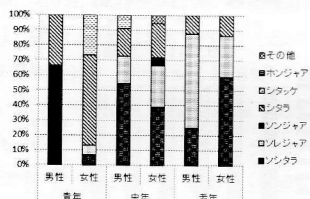
165. シタツケ (全道)



166. シタツケ (札幌市)



167. シタツケ (内陸部)



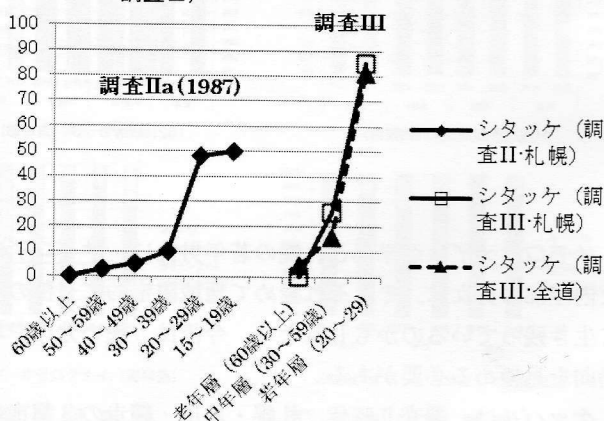
168. シタツケ (海岸部)

文法：該当なし。

上記の項目はどれも、「テレビに出てアナウンサーと話すとしたら」に対し「使わない」との回答が多いことから方言意識は強い。ヤッパは、地域・性別に関係なく若年層のみで浸透。若年層以外では、札幌中年女性が56%と突出しており、子供の影響からと言えるのか、その動機付けの検討は今後の課題としたい。一方、元祖形であるヤッパシ（全道若年15%，中年26%，老年42%）は、今も比較的年配層に用いられており、若者に「古臭い」と評価されているようである。

シタツケ（さようなら）については、いつの時代も変わらず、繰り返し若者が採用するが、加齢とともに廃れ、他世代へも伝播しない語彙と言える。特に札幌の若年層が使用をリードしている感がある（グラフ7）。

グラフ7 シタツケ（さようなら）の経年比較（調査Ⅱ vs. 調査Ⅲ）



6. 考察とまとめ

過去半世紀における北海道方言の経年的動態を見渡すことでいくつかの重要な知見が得られた。

第一に、先行研究から指摘されてきた全道規模での共通語化の進行を背景に、多くの語彙・文法項目の使用（意識）において急速な衰退が改めて確認された。しかし一方、調査Ⅱ時点（1980年代）では方言形の衰退（つまり共通語化）には多大な地域差が見られたが、現時点（調査Ⅲ）における衰退の様相では、いくつかの項目において「海岸部の遅れ」は一貫して見られるものの、とりわけ若い世代における地域間差異は僅かなものとなっている。これは言語を取り巻く社会環境の大きな変動期と関係が深いであろう。調査Ⅰ・Ⅱの被験者とは対照的に、今回（調査Ⅲ）の被験者（特に、老年・中年層）は、高度経済成長を背景とした都市化や人口移動の活発化に伴う方言接触が日常化した時代に生きた人々である。また、テレビの爆発的な普及（1960年代初頭）の時期に言語形成期を過ごした被験者が多く、超地域的な共通語化とも符合する（Ota & Takano, to appear）。

第二に、今回の実時間的検証から、「一個人の言語は一生変わらない」とする前提に立つ「見かけ上の時間」仮説に対する明らかな反証が得られた。生涯変化の存在は、調査Ⅱ-aにおける富良野パネル調査から語彙面・アクセント面（国研1997）、文法面（佐藤2011）ですでに確認されている。今回のトレンド調査の結果においても、方言形の衰退が四半世紀または半世紀後の同一話者世代（つまり、調査Ⅰ若年層・調査Ⅱ中年層＝調査Ⅲ老年層、調査Ⅱ若年層＝調査Ⅲ中年層）で拍車がかかっている事実、および調査Ⅱで指摘された若年層の新方言が調査Ⅲでは当該世代（中年層）のみならず、老年層にも伝播している事実から、すくなくとも語彙・文法面における生涯変化の可能性は大であると判断できる。⁷

第三に、個々人の生涯変化が北海道全体の共通語化に拍車をかける一方で、多くの方言形が半世紀の時を経ても変わらずに保持されていることも明らかになった（佐藤2011）。また、大規模な共通語化と並行して進行する新種の土着語（方言形）の生成がこの半世紀の間、いつの時代にも繰り返し行われてきたこと、また、それが現在も進行中であることも明らかになった（真田2000）。興味深いことに、共通語化とは相対する新種の方言形の定着においても、かつて指摘されたような地域間差異（小野1983）はほとんど見られず、おそらくはマスメディアを媒体とした関西方言や東京新方言の伝播事例が示すように、全道の若い世代が地域的格差なく一様に全国的な新しい表現を積極的に採用している感がある。

また、新方言形の伝播においては、日本語全般にも見られる男女差の縮小（中性化、特に男性の歩み寄り）が特徴的だと言える。生成当時は女性特有とされた形式がその後、男性にも使われるようになり、社会全体に拡張していく事象がしばしば見られた。

最後に、今後の北海道方言をどう見ていくべきか、ポイントは上記類型の中でも特に従来型方言形の「中・小規模保持」、および新方言形の「大規模／中・小規模拡散」にあると考える。今日の比較的若い世代は明らかに二方言（共通語と方言形）併用能力に長けており、場面や状況、話者の社会心理（アイデンティティーなど）などと深く結びつきながらどちらかのコードが選択される。今後はより日常的な場面での自然発露的な談話に目を向けるべきことは言うまでもなく、今まで以上に方言形使用における場面・状況差、さらには方言形を選択する話者の心理や意図（例えば、方言使用の特殊効果など）を分析の射程とする質的観点の統合が強く望まれる。

注

- ¹ 調査の主旨を理解し、積極的に資料収集を行ってくれた北星学園大学在学生の皆さん、被験者として調査にご協力をいただいた道民の皆様、調査結果の電算化に関わりお手伝いをいただいた中村裕介氏(北海道大学情報科学研究科大学院生)、論文のレイアウトに関わりお世話になった米谷さくら氏(北星学園大学文学研究科研究生)にこの場を借りて心より感謝を申し上げたい。本研究は、文科省科研費『急速なグローバリゼーションによる地域方言の変容と話者心理に関する社会言語学的研究』(挑戦的萌芽研究、2009～2011年度、代表者・高野照司)、および国立国語研究所共同研究プロジェクト『接触方言学による「言語変容類型論」の構築』(代表者・朝日祥之准教授)からの研究助成を受け行われた。
- ² ただし、札幌と釧路方言を実時間で調査した尾崎・朝日(2013)、札幌市内の高校生を対象とした道場(1994)、東北地方との関連で特に北海道沿岸地域の方言分布を大規模に調査した井上他(2003)、見野(2010)、見野・朝日編(2012)など、局地的に北海道方言の変異や変化を扱った先行研究がいくつかある。
- ³ この調査成果の一部は、高野(2012, 2013)で発表済みであり、本論考ではそれらに加筆、修正を加え、分析結果に関連する統計資料を掲載した。
- ⁴ 言語形成期以降も、言語はその話者の生涯を通じて変化しようとする学問的立場。
- ⁵ 同一コミュニティにおける言語変化を経年的に追跡調査する実時間調査において、前回調査に参加した被験者を(通常は数十年後に)再度被験者として調査し、その被験者の個人語内における経年的変化を記述するアプローチ。ランダム・サンプリングに基づきコミュニティ全体に広がる言語変化の動態を記述する実時間トレンド調査(次節参照)の成果とコミュニティの成員である個々の話者の個人語の変化を照らし合わせることで、言語変化のプロセスをより緻密に記述することが可能となる。
- ⁶ 当然のことながら、変化をし続ける言語において「新方言」の生成は、調査Ⅰ時点でも見られた事象であろうが、ここでは先行研究成果との経年的比較を目的とするため、主に調査Ⅱ時期(1980年代)に確認された新方言項目に限定して論じる。従って、調査Ⅱで主に若い世代が用いる「新方言的」項目であっても、調査Ⅰ時点ですでに全道で広く使われていると指摘されている場合は除外することにした。
- ⁷ 一方、アクセントは生涯変化するが、音声は変化しづらいとする立場もある(国研1997、横山・真田2010)。筆者自身はアクセントの生涯変化については懐疑的である。2010年より札幌市山鼻地区において、先行調査(小野1993)の被験者を20年後に再調査する実時間パネル調査を継続中であるが、分析対象となる語彙、数十項目中、共通語アクセントへの生涯変化は皆無とは言えないものの、あったとしても一人当たりせいぜい数項目(数パーセント)程度で、個人のアクセント体系全体を揺るがすような組織的变化は見られない。変化を示す語彙も人によってまちまちである。比較的高い割合(10%台)で生涯変化を示す話者はむしろ少数派という結果がこれまでの段階で得られている(高野2011)。これらの結果は、主に当時の中年層(現在の老年層)から得られたものであるため、今後、当時の若年層(現在の中年層)にも分析の射程を広げた際にどのような結論となるのか、近い将来、機会を見て論じたいと考えている。

引用文献

- Blake, Renee & Josey, Meredith. (2003). The /ay/ diphthong in a Martha's Vineyard community: What can we say 40 years after Labov? *Language in Society* 32 (4): 451–485.
- Chambers, J.K., & Trudgill, P. (1998). *Dialectology (Second Edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 道場優 (1994)「高校生における北海道方言の実態について ～札幌市内高校生の場合～」北海道方言研究会20周年記念論文集 394～407頁
- 井上史雄 (1976)「道南浜ことばにおける共通語化のパターン分類」北海道大学人文科学論集13
- 井上史雄(編) (1983)『新方言と言葉の乱れに関する社会言語学的研究 ～東京・首都圏・山形・北海道～』科学研究費 総合研究A 研究成果報告書
- 井上史雄・玉井宏児・鍵水兼貴(編著) (2003)『東北・北海道方言の地理的・年齢的分布』科研費基盤研究(B)

- 『現代東北方言の地理的・社会的動態の研究』研究成果報告書
- 尾崎善光・朝日祥之 (2013) 「北海道における方言使用の現状と実時間変化 ～札幌市・釧路市における
 多人数調査の結果から～」北海道方言研究会会報 第89号 92～101頁
- 河崎裕子・井上史雄 (1983) 「首都圏の＜新方言＞」井上史雄 (編) (1983) 『新方言と言葉の乱れに関する
 社会言語学的研究 ～東京・首都圏・山形・北海道～』科学研究費 総合研究A 研究成果報告書
 183～208頁
- 見野久幸 (2010) 「北海道方言の地理的勢力分布と動態・伝播の諸相」日本方言研究会 発表予稿集 25
 ～34頁
- 見野久幸・朝日祥之 (編) (2012) 『接触方言学による「言語変容類型論」の構築 ～北海道と東北・新
 潟の30歳代から50歳代における方言の地理的勢力分布』国立国語研究所 共同研究報告12-01
- Kerswill, P., & Williams, A. (2000). Creating a New Town koine: Children and language change in
 Milton Keynes. *Language in Society* 29: 65-115.
- 国立国語研究所 (1965) 『共通語化の過程 ～北海道における親子三代のことば～』国立国語研究所報告
 書27
- _____. (1997) 『北海道における共通語化と言語生活の実態 (中間報告)』国立国語研究所
- Labov, William. (1963). The social motivation of a sound change. *Word*, 19: 273-309.
- 荻野綱男・山敷陽子 (1983) 「東京における新方言」井上史雄編『＜新方言＞と＜言葉の乱れ＞に関する
 社会言語学的研究 昭和57年度科学研究費補助金 (総合研究A) 研究成果報告書 17～69頁
- 小野米一 (1983) 第9章「北海道方言の＜新方言＞事象」井上史雄編『＜新方言＞と＜言葉の乱れ＞に
 関する社会言語学的研究 昭和57年度科学研究費補助金 (総合研究A) 研究成果報告書
- _____. (1993) 「札幌市方言多人数調査資料について」『東日本の音声 論文篇 (3) 主要都市多人数調
 査 (札幌市・名古屋市) 報告』研究成果報告書 (研究代表者 加藤正信) 51～86頁
- Ota, I., & Takano, S. (in press). The media influence on language change in Japanese sociolinguistic
 contexts. In Jannis Androutsopoulos (ed.), *Mediatization and Sociolinguistic Change*, Mouton de
 Gruyter.
- 真田信治 (編著) (1999) 『展望 現代の方言』白帝社
- 真田信治 (2000) 『脱・標準語の時代』小学館文庫
- Sankoff, G., & Blondeau, H. (2007). Language change across the lifespan: /r/ in Montreal French.
Language 83 (3): 560-588.
- 佐藤亮一 (2011) 「北海道における (約) 27年間の言語変化 (文法項目について) ～国立国語研究所の
 パネル調査から～」北海道方言研究会会報 第88号 83～91頁
- 高野照司 (2011) 「札幌方言名詞アクセントの実時間研究 ～山鼻地区パネル調査 第一次報告～」北海
 道方言研究会会報 第88号 40～58頁
- _____. (2012) 「北海道方言の共通語化・新方言の半世紀後の様相 ～実時間トレンド調査による検証
 ～」北海道方言研究会 第200回記念大会口頭発表 北海道大学
- _____. (2013) 「北海道方言の共通語化・新方言の半世紀後の様相 ～実時間トレンド調査による検証
 ～」北海道方言研究会会報 第89号 76～91頁
- 横山詔一・真田治子 (2010) 「言語の生涯習得モデルによる共通語化予測」『日本語の研究』6 (2), 31～
 45頁

[Abstract]

The Processes of Standardization and Indigenization of Hokkaido Japanese Over a Half Century: A Real-time Trend Study

Shoji TAKANO

It is widely known that Hokkaido Japanese has undergone large-scale standardization since the post-war era. Rigorous investigation of linguistic variation and change in Hokkaido, on the other hand, had its peak in the 1980s, and it has quickly become obsolete since then perhaps due to a general assumption that linguistic standardization in Hokkaido is near completion. Accordingly, it is not deniable that recent linguistic situations in Hokkaido have been understudied for this past quarter century. Based on questionnaire survey data on variable uses of lexical and grammatical features provided by 241 Hokkaido-born informants, the present study answers the following questions: how standardization of Hokkaido Japanese has progressed in more recent years, what has happened to newly born indigenous uses of language (often labeled as “neo-dialects”) that emerged against the wave of massive standardization back in the 1980s, and what features of Hokkaido Japanese in particular have died out under the pressure of standardization or have survived (or even diffused) as the markers of local pride and identity. The study adopts the real-time paradigm of research on language change. Taking advantage of the outcome of a few large-scale studies that were conducted in the 1950s (Survey I) and the 1980s (Survey II), this follow-up study (Survey III) proposes the typology of real-time trajectories of linguistic changes that have taken place in Hokkaido over this past half century.

Key words : Language Change, Real-time Study, Standardization, Neo-dialects,
Hokkaido Japanese